

聖徒の道 9 1976



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグラント・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレイ
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキエ
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト

諮問委員会

ハワード・W・ハンター
デビッド・B・ヘイト
ロバート・D・ヘイルズ
O・レスリー・ストーン

教会誌編集主幹

ディーン・L・ラーセン

国際機関誌

ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

八木沼 修一 (日本語コーディネーター)

1976年 9月号

も く じ

聖典を調べなさい……スペンサー・W・キンボール……	445
子供に福音を教える……ジェフリー・R・ホランド……	448
あなたの責任……トム・G・ローズ……	450
それは家族から……アーサー・R・バセット……	452
質疑応答……	455
モルモン経の年代表……	456
おだやかな心……	457
しっばいばかりのエリック……	458
おもちゃばこ……	460
ヨセフ……	462
モルモン経の物語は……	464
日々の恵み……	466
質疑応答……	472
監督と長老定員会会長との関係……	473
ローカル・ニュース……	476

聖徒の道 9月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・
センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約1,700円 1部 150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE Printed in Japan

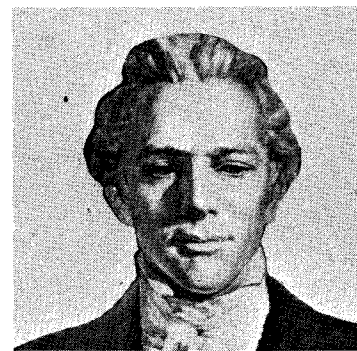
郵便振替口座番号 東京 0-41512
口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター



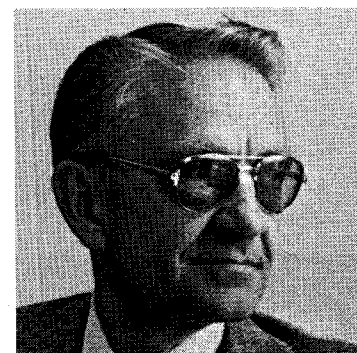
p. 452



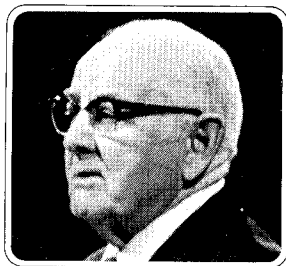
p. 450



p. 457



p. 455



聖典を調べなさい

大管長

スパンサー・W・キンボール

兄 弟姉妹、このメッセージを通して、皆さんに聖典を研究するようお勧めしたい。「聖典を調べなさい。あなたがたは、聖典の中に永遠の命があると思っているが、聖典は、わたしについてあかしをするものである。」（欽定訳ヨハネ5：39）

恐らくお気づきであろうが、ここ数年来教会幹部は、個人として、また家族として毎日家庭で福音の勉強をするよう、愛の心をもって勧めてきた。その勧告の頻度はしだいに増えている。教会の成人クラスでは他の書物に代えて標準聖典をテキストとして使っている。さらにほとんどの集会ではその終りに、聖典を読んで研究するようという神権指導者の靈感あふれる勧告が発せられている。

これまでにめざましい進歩があったと信じている。大勢の教会員が集会に聖典を持参し、学び、話し合う用意をして集い、多くの両親が、神よりの靈感に従い、標準聖典を使って子供に王国の教義を教えるようになった。私たちはこれらの状態を喜び、満足している。またその結果多くの祝福がもたらされることを承知している。

しかしながら、各地のステーク部や伝道部を訪れてみると、定期的に聖典を読み思索することがなく、人の子らに対する主の教えを少ししか知らない聖徒たちがまだ多い。このことを残念に思う。多くの人々がバプテスマを受けて証を得、「この真直ぐで狭い道に入った」が、次に求められている段階、すなわち「たえずキリストの言葉をよく味わいながら強く進み、終りまで堪え忍ぶ」ことを怠っている。

る。（Ⅱニーファイ31：19、20）

ただ忠実な者だけが、約束されている報い、すなわち永遠の生命を受けるのである。「御言^{みことば}を行う人」（ヤコブ1：22）となって雄々しく主の戒めに従わなければ、永遠の生命は得られないからである。また、まず「聞く人」とならなければ「御言を行う人」にはなれない。そして「聞く人」となるには、ただ怠惰にすわったまま、偶然に聞こえてくる教えを待っていてはならない。尋ね求め、研究し、祈り、理解することである。主はこう言われた。「わが声を受け入れざる者はわが声を知らず、故にわれに属ける者にあらざるなり。」（教義と聖約84：52）

現代の教会指導者の不断の励ましと勧めの言葉だけでなく、古代の予言者たちの言葉も聖典のどのページからも叫ぶように聞えてくる。主のみ言葉すなわち「キリスト・イエスに対する信仰によって救に至る」（Ⅱテモテ3：15）神聖な聖典を研究しなさい、と。ところが、私たちは必ずしもそれに耳を貸さない。どうしてなのかを胸に問うてみるとよいであろう。

聖典を持つことがいかに希少な特権であるか、またそれを持っていることで自分がいかに恵まれているかをよく認識していないために、聖典を大して重要視しない傾向があるように思う。これまでの生活に安閑とし、福音の教えを聞くのに慣れ切ってしまった私たちは、もしそれがなかったらと想像するのがむずかしいようである。

しかし私たちは、世界が大背教と呼ぶ霊の暗黒の長い旅

を抜け出してから、たかだか156年しか経っていないことを理解する必要がある。1820年の春、御父と御子がジョセフ・スミスに現われたもうたあの日まで、霊の暗黒が深く世を支配していた。予言者ニーファイが予見した、福音の取り上げられた「おそろしい盲目の有様」、その暗闇の深さの幾分かを、私たちは悟り知る必要がある。(Ⅰニーファイ13：32参照)

モルモン経が出版された1830年に至るまで、アメリカ大陸ではモルモン経の民の末裔が14世紀以上も神の導きを全く失った状態で暮らしていた。彼らの神聖な記録は、この福音の神権時代に世に出るべく封じられていた。私は、偉大な予言者モルモンが血の修羅場で、自分の民ニーファイ人の滅亡と殺りくを眼前に立ちつくしている有様を読むたび、胸を強く突かれる。彼はモルモン経のすべての予言者と同様に、予言された背教の暗黒時代が来なければならないことを承知していた。にもかかわらず、彼の言葉は苦悶に満ちている。

「ごらん、現在の民は主の『みたま』がすでにかれら(レーマン人)を励ますことを止めたまい、その上キリストと神とに交わることができず、天から音ずれを受けずに世に在るから……今やちょうど風に吹き散らされるもみがらのように、またちょうど帆もいかりも舵もなしに波のまにまに標う船のように、サタンによってあちらこちらへ誘われる。」(モルモン5：16、18)

旧世界の民も事実上錨のない状態であった。初期の教会は使徒たちの殉教によって背教の海に沈んでしまっていたからである。聖書の写本はあるにはあったが、比較的少数の、しかも神の導きを失っている人々の手中にあった。そして、この時期に、「誰にもわかる大へん貴い部分」の多くが失われたのである。(Ⅰニーファイ13：28、32参照)

私たちはこの世の旅人である。なすべき使命を持って、すなわち主の導きを要する大きな業をなすべく送られた旅人である。私は、天が沈黙し、みたまが取り去られた霊の暗黒時代に生まれなかったことを心から感謝している。私たちを導く主のみ言葉がないということは、広大な砂漠で何らの目印も見出せない旅人、あるいは洞窟の深い闇の中で外界へ通じる道を示す光を見出せない流浪者と同じである。

ベトナム戦争のさなか、何人かの教会員が捕虜となって、ほとんど外界と隔絶した状態になった。そして聖典を手にもすることも許されなかった。彼らは後に、食物よりも自由よりも、真理の言葉が欲しかったと語っている。何をもっ

てしても、書棚に眠る聖書やモルモン経のわずか1ページにさえ代えることはできなかったのである。彼らは苦しい経験から、ニーファイの気持の片鱗を知った。ニーファイはこう記している。

「それは私の身も心も聖文を喜ぶので、私が心にそれをよくよく考えて私の子孫たちの学問と利益とになるようにこれを書き誌すのである。ごらん、私は身も心も主に関する事を喜び、私の心は私がこれまでに見聞きしたことを絶えずよくよく思っている。」(Ⅱニーファイ4：15、16)

予言者イザヤは、ある節で大背教について語った。「主が深い眠りの霊をあなたがたの上にそそぎ、あなたがたの目である預言者を閉じこめ、あなたがたの頭である先見者をおおわれたからである。」(イザヤ29：10; Ⅱニーファイ27：5をも参照)

しかしイザヤはそのすぐ後で、暗黒の終りとモルモン経の出現を明確に告げている。

「それゆえ、このすべての幻は、あなたがたには封じた書物の言葉のようになり、人々はこれを読むことのできる者にわたして、『これを読んでください』と言え、『これは封じてあるから読むことができない』と彼は言う。またその書物を読むことのできない者にわたして……」(イザヤ29：11、12)

こうして、驚くべき業、主のなそうと約束された「不思議な驚くべきわざ」が始まった。(イザヤ29：14参照)

予言者ジョセフ・スミスによる福音の回復以来、1,600万部を越すモルモン経が26ヵ国語で出版され、15ヵ国語余りが現在翻訳中である。聖書はといえば数知れない部数が出版され、その数において他の本をはるかに引き離している。また私たちには教義と聖約、高価なる真珠もある。そしてこれらの貴い聖典に加えて、私たちには、その聖典を活用する能力と教育が与えられている。それは歴史上かつてなかったことである。

古代の予言者たちは、暗黒の後に光明が訪れることを知っていた。私たちはその光の中に生きている。だが果たして光を十分に理解しているであろうか。救いの教義を簡単に手の届く所に持ちながら、いまだ見えない目と聞こえない耳と「鈍い心」しか持ち合わせていない人々のいることを私は危惧するのである。

これまでに私が述べたことを軽々しく聞き流すことのないように、ここで少し、人間の陥りがちな過ちについて話したい。それは、何か誠実や成功といったことを話すときには「私が」と考え、怠慢や失敗について話すときには「私

たちが」と考える傾向のあることである。しかし私は教会員全員に、聖典の勉強について正直に自己評価してほしいと思う。よく知っていてすぐに浮かんでくる聖句が幾らかあって、そのために自分は福音をかなり知っているという錯覚に陥るのはよくあることである。その意味で、わずかな知識のあることが実際に問題となる場合がある。私は、だれもが一生のうちでいつかは聖典の価値を悟らなければならない、それも一度だけではなく何度も何度も再発見しなければならないと信じている。

それに関連して、旧約聖書のヨシヤ王の話は、「その言葉を自分たちに言った言葉と考える」（Ⅰニーファイ19：24）と非常にためになる。私はそれを聖典中でも最も素晴らしい話のひとつと考えている。

ヨシヤはわずか8歳にしてユダの王となったが、それまでの王たちが極悪であったのに、「ヨシヤは主の目にかなう事を行い、先祖ダビデの道に歩いて右にも左にも曲らなかった」（列王下22：2）と聖典に記されている。当時（紀元前587年のエルサレム滅亡からちょうど2世代前）モーセの律法の記録が失われて、神殿の祭司たちの間でも事実上正しい道がわからなくなっていたことを知れば、これは実に大きな驚きである。

ヨシヤは統治の18年目に神殿を修築させた。このときに大祭司ヒルキヤは、モーセが契約の箱に収めておいた律法の書を見つけ、それをヨシヤ王に届けた。

ヨシヤは律法の書の言葉を聞くと、「その衣を裂き」、主のみ前で泣いた。

そしてこう言った。「……われわれの先祖たちがこの書物の言葉に聞き従わず、すべてわれわれについてしるされている事を行わなかったために、主はわれわれにむかって、大いなる怒りを発しておられる。」（列王下22：13）

そして王はその書をすべての民に読み聞かせ、このときに民はみな「心をつくし精神をつくして」（列王下23：3）主のあらゆる戒めに従うと誓った。ヨシヤは偶像や礼拝の森や高き所や先代統治の間に蓄積して国と国民を汚した忌むべきすべてのものを取り除いて、ユダ王国を清めることを始めた。また厳粛な過越の祭を行なった。「さばきづかさがイスラエルをさばいた日からこのかた、またイスラエルの王たちとユダの王たちの世にも、このような過越の祭を執り行ったことはなかった。」（列王下23：22）ヨシヤはこれらのすべてのことを、「祭司ヒルキヤが主の宮で見つけた書物にしるされている律法の言葉を確実に行うために」したのであった。「ヨシヤのように心をつくし、精神

をつくし、力をつくしてモーセのすべての律法にしたがい、主に寄り頼んだ王はヨシヤの先にはなく、またその後にも彼のような者は起らなかった。」（列王下23：24、25）

私たちはヨシヤ王が行なったように聖典に立ち返り、聖典を十分に活用することによって、主に仕えるよう強く決心しなければならない。私はそう強く感じる。

ヨシヤにはモーセの律法しかなかった。しかし私たちの聖典にはイエス・キリストの完全な福音がある。甘いものには、豊かな喜びがあるのである。

「多く与えられた者からは多く求められる。」（ルカ12：48）主はそれらのものをいたずらに私たちに与えてはもられない。それらを持つことは、それらに対する責任を持つことである。私たちは主の戒め（Ⅲニーファイ23：1－5参照）に従い、聖典を研究しなければならない。また聖典を私たち自身と子供たちの生活の道しるべとしなければならない。そしてそれを持った今、私たちには愛する先祖に心を向ける責任がある。大勢の先祖は、私たちもあるいは経験したかもしれない長い暗黒の夜を耐え、恐らく今もなお私たちの身代りの働きを待ちかねているのである。

主のみ教えは、いつも「見る目」と「聞く耳」を持つ人々に与えられてきた。その声は明瞭で誤解の余地がない。この素晴らしい機会を軽視する者に対してその証は確実に及ぶのである。

従って私はすべての人に、これまでしていなければ今、聖典の研究を熱心に始めるようお願いする。恐らくその一番簡単で有効な方法は、教会の学習プログラムに参加することである。

教会の成人学習課程では、メルケゼデク神権定員会と日曜学校の福音の教義クラスで、標準聖典を順次勉強する。8年間に旧約聖書、高価なる真珠、新約聖書、モルモン経、教義と聖約をすべて学ぶことになっている。全員がこの聖典学習プログラムを支持し、これをまず第一に置いて、よく相互調整されたこの教会のプログラムが不適切な読書の割当てによって効果を半減されるようなことのないように願っている。

その年の学習の対象とされている標準聖典を熱心に研究していただきたい。

この素晴らしい機会を逃さないようにお勧めする。

願わくは私たち皆が聖典を祈りをもって読み、入念に研究し、神から与えられたものであるという証を得るように。

子供に福音を教える



聖典を生きたものに

ジェフリー・R・ホランド

「彼らはその書、すなわち神の律法をめいりように読み、その意味を解き明かしてその読むところを悟らせた。」
(ネヘミヤ8:8)

どんな本でも、読むときに大切なのは目を覚まして読むことです。目を見開いて、血のめぐりを活発にすることです。しかし、本当の読書をするにはそれだけでは足りません。心を配り、注意して、1ページ1ページ内容を吸収しようと集中することです。良い書を著わすのは大変な仕事ですから、それを読むのも容易ではありません。

聖典を読むのにむら気や上っ調子やななめ読みは禁物です。時間と祈りと真面目な瞑想が要求されます。ニーファイ第一書の第1章はモルモン経の中でみんなに一番なじみが深いと思いますが、注意して読まなければ、その意味を理解できないでしょう。念入りに書かれたのですから、念を入れて読まなければならないのです。

ある父親が12歳になった娘に、この

第1章から読書の手ほどきを始めたしましょう。遊び好きな快活な少女でこれまで何度かモルモン経を読みかけたのですが、どうも興味が持てませんでした。彼らの会話を聞いてみましょう。

父親：さあ、ニーファイ第一書の1章を読もうか。20節しかないよ。わずかな数ページだ。考えながら読んでごらん。疑問に思うことは、じっくり考えて。

ドナ：疑問に思うことって？

父親：うん、たとえば、「どうしてモルモン経の最初の章にこれが来たのか」とか、「この節とこの節はどんな関係があるんだろう」とか。

ドナ：そーお、そんなこと全然わからないけど、私どうしてジェレド人のところから読み始めないのか、知りたいわ。北アメリカに最初に来た人たちでしょ。

父親：そう、それこそいい質問じゃないか。今ドナが質問を思いつくまで1分30秒かかったね。同じように、答

を捜すにも……疑問の答えを捜すときは……

ドナ：パパ！ パパは私にとことん考えさせてから、答えを教えるつもりなのね。

父親：そう！ 疑問の答えをドナが自分で考えだしたら、モルモン経のどこでもすらすらわかるようになるさ。よく注意して読んだら、イテル書がどうしてこの箇所に来たのか、わかるよ。イテル書まで進んだら話そう。イテル書は終りの方にあるからね。じゃいいかい。始めるよ。

ドナ：かしこまりました、パパ。(ドナは黙読を始める。数ヵ所ひっかかるが、第1章を読み終わる) おしまい。読んだわ。

父親：よし。何を言ってると思う？

ドナ：パパ、読んだって言ったのよ。意味がわかったなんて言ってやしないわ。

父親：そうか、じゃあもう一度読もう。今度は少しゆっくり、それから声

を出して読もう。そして読みながら話そう。

ドナ：はいはい、パパ。(声を出して)「私すなわちニーファイは善い父母から生れたので……」

父親：ニーファイはどうしてこういう書き出しにしたと思う？

ドナ：そう……立派な人だったからかしら。

父親：そうだね。そのほかには？

ドナ：家族の話だから。

父親：そう、それから。

ドナ：どんな人が書いているか、自己紹介したいのね。

父親：そうだね、それから。

ドナ：パパ！こんなにしたら夜までかかるわ。あしたは学校があるのよ。学校でこんなにスローモーに読んでたら、先生怒っちゃうわ。私ひとりて読むから、何か聞くまで黙ってて。いい？

父親：いいよ。

(ドナは1章を声をあげてゆっくり読む。横目で父親を見ながら)

父親：よーし、さてと。どういうことを言ってるのかな。

ドナ：(父親に聞かれることがわかっていたので、やっぱりというふうに苦笑いして) 示現を見て、人々に警告をしているリーハイという人の話よ。リーハイはきらわれてるの。

父親：(ドナが前よりも気持を入れて読んだのを知って、にっこりしながら) こりゃすごい。リーハイのような人を何て呼んでいる？

ドナ：予言者。

父親：リーハイはどうしたから示現を見ることができたのかな。

ドナ：わからない。書いてないもの。

父親：書いてあるよ。5節を見てごらん。

ドナ：(読んで) ああ、お祈りしたの。気がつかなかった。次のページに移ったのが早すぎたんだわ。ほら、ページの終りのあたりだから、ね。

父親：いいんだ、ドナ。急ぎすぎて祈りのことを忘れる人は多いもんだ。

ドナ：ええ？

父親：なんでもない。さて、リーハイは示現で一体どんなことを見た？

ドナ：エルサレムが減びようとしていたのを見たわ。

父親：待て待てドナ。急がないで。リーハイはそれをどんなふうにして知

った？

ドナ：(読み返して) えーと、天から降りてきた方が本をくれて、それを読んだの。

父親：だれだかわかるかい？

ドナ：イエス様みたい。

父親：パパもそう思うよ。ドナはさっき、リーハイが人々にエルサレムは滅びると言ったとき、リーハイはみんなにきらわれたって言ったね。それで人々はどんなことをした？

ドナ：(読み返して) リーハイをあざけり笑い、怒ったの。

パパ：怒ったって、どんなふうに？

ドナ：えーと、最後はリーハイを殺そうとした。

父親：それじゃあ、ここに1章のあらすじを書いてみようか。こんな具合じゃないかな。

予言者が祈る

示現を見る

天使を見る(たぶんイエス様も)

本を受け取る

ほとんどの人から拒まれる

ドナが説明してくれた1章は大体こんなふうだ。よくわかっただろう？

ドナ：そうかな。

父親：考えてごらん。

ドナ：そうね、ジョセフ・スミスのと きみたいね。そうだ！ジョセフ・スミスのときに似てる。ぴったりだわ。すごい。どうして？ パパ。

父親：うーっ、むずかしいね。ひとつ答えになると思うけど、予言者はだれでもたいてい似たような経験をするよ。どんな場合でも、私たちが知っているのは、予言者はみんな主から啓示を受けてるってことだ。ジョセフ・スミスはね、あるときこう言った。啓示はどんなときにもイエス・キリスト教会の土台となる岩で、啓示がなければ決して救いはないって。ドナ、この本は啓示についてのひとつの長い啓示だと思うよ。そしてイエス様が本全体の主題だ。この最初の20節は、それから先にどんなことが書かれているかよく説明してると思うんだ。最初の章に実にぴったり、おあつらえ向きなんだよ。

それから、こんな書き出しでモルモン経が始まっているもうひとつの理由として、もしもリーハイとモルモン経を受け入れたら、ジョセフ・スミスを神の予言者として受け入れざるを得な

いってということもあると思うよ。それから逆に、ジョセフ・スミスを予言者として受け入れたら、彼が翻訳したこの本の教えを受け入れて忠実に守らなければならない。

ある意味でだね、ドナ、この記録はニーファイやアルマやモルモンやモロナイの証だけでなく、ジョセフ・スミスやブリガム・ヤング、ハロルド・B・リー、スペンサー・W・キンボールの証でもあるんだ。モルモン経の翻訳を終えて出版されるまで教会が組織されなかったわけは、それだと思うんだよ。ジョセフ・スミスはモルモン経を「私たちの宗教のかなめ石」って呼んだ。パパは思うんだけど、たいていの人は、17歳の予言者がモロナイから金版を受け取ってからいろんな出来事に、モルモン経がどんなに重要だったか、よく理解していないんじゃないかな。ジョセフが最初に示現を見てモロナイからこの本を渡されたときから、教会がどんなふうになってきたかを考えると、14節のようにリーハイと一緒にになって叫びたい気持がするよ。「主なる全能の神よ、汝の御業はいかにも偉大で驚嘆すべきことばかりである」って。ドナ、パパは本当にこの本が好きだよ。これは神様のみ言葉だ。

ドナ：パパ、パパがこんなふうに話すの、初めて聞いたわ。

父親：そうかい、12歳の君にパパの前でモルモン経を読ませたことなんてなかったからね。

ドナ：あら、もう10時過ぎたわ。こんなに短い章で45分以上も話してたのね。私寝なくちゃ。叱られちゃう。

父親：どうかな。叱ろうかな。さあさあ、急げ、急げ、早く寝なさい！

ドナは父におやすみのキスをして、ベッドにもぐり込む。モルモン経と福音の回復の証を彼女なりに深めて。

ドナの父親が知っていること、そしてドナ自身でわかりかけたことは、どの章にも意味があり、それもいろいろな意味があって、必ずそこから靈感と啓示が得られるということにはほかならないのです。ドナがぐっすり寝入ったかわらで、父親は、この素晴らしい経験をこれで終りにすまいと決意しています。



あなたの責任

トム・G・ローズ

私がマリリンと結婚して1年になるかならないかの頃、デビッド・O・マッケイ大管長が総大会で、「いかなる成功も家庭における失敗を償うことはできない」と話されました。

出産をひかえた私たちにとって、その靈感あふれる言葉は非常に感動的でした。これから親になろうという理想に燃えた末日聖徒の若者たちは、だれでもきっと同じように感じたと思います。私たちは、必ず子供を正しく育てることができるという自信のようなものを感じました。今振り返ってみると、何と無知な、と笑ってしまいます。

小さな子供がこの地上で義しく立派な一生を過ごせるように、自分に与えられる機会を無にしないことこそ、あなたの責任です。

「あなたがた両親は、この責任をほかのだれにも委譲できない」(J・ルーベン・クラーク・ジュニア「大会報告」1951年10月、p. 57)

初めての子が個性を見せ始め、多少とも親としての経験が始まると、私たちは自分や子供たちの中に不完全な点があることを感じ始めました。それは驚きでした。そのために、立派な親になるためにはただ気持だけあってもだめ

だということがわかるようになりました。創造力と靈感と実行が必要なのです。

あなたは今までそのような気持を感じたことはありませんか。たいていの親は一度や二度はそんな気持を持つものです。そしてそのようになると、一般論は何の役にも立ちません。その人に合った手本が必要なのです。

親という一番大切な責任を果たすために私たちが行なったことでひとつ良かったのは、毎日家で聖典を読む習慣をつけたことです。私たちは毎朝子供たちを早めに起こして、15分間聖典を読みます。体に毎日栄養や運動が必要のように、霊も毎日の聖典の勉強によって強くすることが必要です。教会の組織で行なわれる系統的な学習計画は毎日の聖典の勉強と家庭の夕べのレッスンを補ってくれます。

モーセはイスラエルの人々が約束の地へ入る準備として、親たちにこう勧めました。

「それゆえ、これらのわたしの言葉を心と魂におさめ、……これをお子たちに教え、家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、それについて語り、……」(申命11:18、19)

多くの家族が、この忠告に従って素晴らしい経験をしています。

マリオン・G・ロムニー副管長は1949年の総大会で次のように語りました。

「私はこの素晴らしい本をよく理解するようお勧めする。子供たちに読んであげていただきたい。幼なすぎることではない。私は何年も前に自分の子供に読んであげた時のことを覚えている。そのとき私は二段ベッドの下に寝て、息子は上の段にのぼり、ニーファイ第二書の最後の3章を声を出して交替で読んでいた。息子の声は風邪をひいたようにかすれてきたが、最後の章まで読み終えた。そして読み終えるや、こう尋ねてきた。

『パパ、パパもモルモン経を読んで泣くことある?』

『あるよ、時には主のみたまがモルモン経は正しいと私に強く証をするので、その時は泣くよ。』

『ああ、そう。僕も今そのように感じたんだよ。』

必ずしもみんながそのようになるとは思わない。しかしこのように感じる人はたくさんいる。私は、この書物は私たちが読み、従うために主が与えて下さったということをよく知っている。そして、これほど私たちを主のみたまに近づけてくれるものはない。さあ、この書物を読もうではないか。」「(大会報告」1949年4月、p. 41)

スペンサー・W・キンボール大管長も、若いときに自分の家庭で毎日聖典を読んでいたことを話しています。

「私は子供の頃に、初期の使徒たちや兄弟姉妹の感動の物語を読んで、強い印象を受けたことを覚えている。まだ執事にもならないほんの少年の頃、屋根裏部屋へ通じる曲がり階段を登って行ったら、部屋と言うにはお粗末な暗い屋根裏で、毎晩毎晩石油ランプのあかりを頼りに聖書を読んだものである。ペテロに心を動かされたことを今でも覚えている。」「(『聖徒の道』1976年





6月号、p.249)

このような話は私たちの心を強く打ちます。

私の家の長男、スチーブンが8歳のとき、私たちは彼にモルモン経を与え、8歳の子には大仕事のモルモン経の読書を始めさせました。

スチーブンと私は、毎朝小さい子供たちが起きないうちに早く起きて、1節ずつ順番に読みました。スチーブンの語彙は少ないので、ときどき止まって単語や文章について話し合ったり、読んだ箇所を復習したりしました。

その読書を始めて2ヵ月後、とてもうれしい出来事がありました。マリリンとふたりで父兄会に行ったとき、スチーブンの先生がわざわざ来て、ちょっと興奮気味に、この頃非常に成績が上がっていますが御存知ですかと言われたのです。モルモン経を読み始めてから、スチーブンの読書力が次第に伸びてきたのです。

モルモン経の読書計画は、そのときすでにひとつの成果を上げていました。それからさらにどんな成果が生まれるか大変楽しみでした。私たちは、ジョージ・アルバート・スミス大管長の次の言葉を証することができます。

「兄弟姉妹、私たちの家庭では、家

族を集めて聖典の真理を教えることが私たちの特権、いや私たちの義務である。どの家庭でも、主のみ言葉を読むように子供たちを励ますべきである。あらゆる神権時代に啓示されたままのみ言葉を。私たちは聖書、モルモン経、教義と聖約、高価なる真珠を読むべきである。家族はそれを読むだけでなく、子供たちが地上の民に対する神のみこころを理解できるように、説明してあげるべきである。」(「大会報告」1914年4月、p.12)

子供の聖典の勉強はごく幼ないうちから始めることができます。2歳の幼児も父や母のひざで絵本を見、愛を感じることができます。

愛が、子供に聖典を教えるときの大切な要素です。ジョセフ・F・スミス大管長が言われたように、あなたは、「子供をオームのように訓練して、詩を繰り返させたり学芸会で話をさせたりといういろいろなことができる。子供は感情もなく、あなたが期待する効果を心に持つこともなく、機械的にそれをする。」

しかし、「もしあなたが子供に、彼らを愛していること、彼らのために思っていること、そしてあなたが子供の一番信頼できる友であることを感じさ

せることさえできるなら、今度は彼らがあなたに信頼を置き、あなたを愛し、あなたの言いつけを守ろうとするだろう。」(「大会報告」1902年4月、p.98)

私たちも子供もあらゆる角度からサタンに攻められる現代に、私たちはニーファイが教えたこと、つまり聖典はキリストのみ言葉で、それに耳を傾けるならば私たちのなすべきことがすべてわかるということを信じています。

(Ⅱニーファイ33:10、11; 31:20; 32:3参照) 昔リアホナガリーハイの家族を約束の地へ導いたように、聖典は私たちを「憂き世を越えてはるかに善い約束の世へ」導いてくれます。(アルマ37:38-46参照)

あなたは親です。それがあなたの責任です。日曜学校、初等協会、アロン神権と若い女性、セミナリーやインスティテュートの学習課程を通して、教会は付随するさまざまな祝福と共に、救いの計画を上手に体系的に教えています。それはみな、責任を立派に果たせるように助けるものなのです。

ブリガム・ヤング大管長がかつて語ったひとつの言葉に私はいまだに強くひかれている。その言葉はこうである。「兄弟姉妹、あなたは聖典を、1千年、2千年、5千年の昔に自分で書いたかのように読んでいるだろうか。あなたはそれを記録した人々の立場に立って読んでいるだろうか。まだそう感じていないとしたら、そう感じるように努め、日々の行ないや会話、また仲間や家族となじんでいるように、神のみ言葉の意味と精神とに慣れ親しんでいただきたい。」

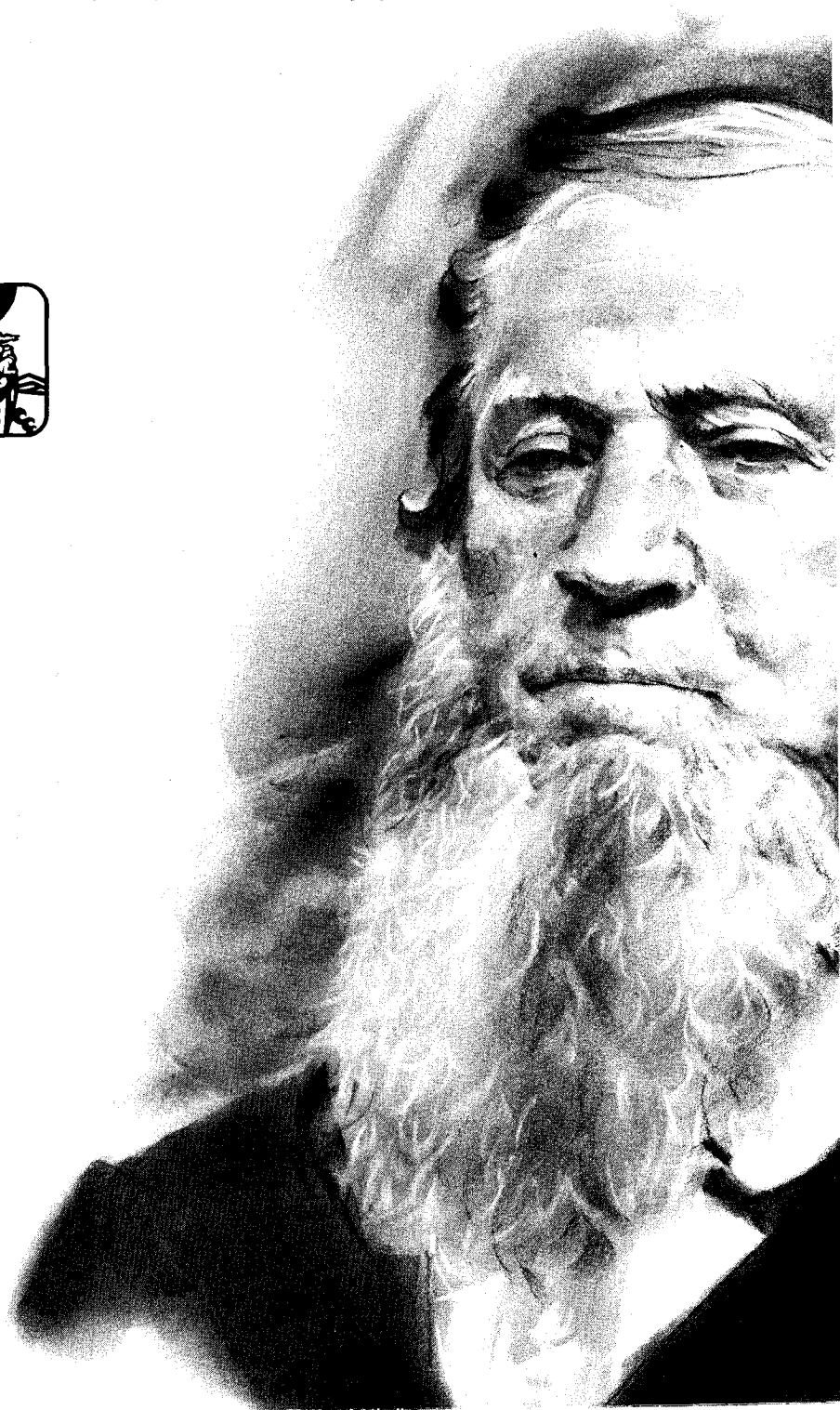
ヤング大管長は続けてこう約束している。「そうすればあなたは、予言者たちが理解し、考えたこと、彼らが兄弟たちに良かれともくろみ計画したことを理解できるであろう。あなたが神のことについて何かをつかむことができたと感じ、神がどのような御方かを知り始めるのはそのときである。」（「説教集」7：333）

私たちはたいてい、ただの傍観者として聖典に接している。何の努力もせずに教えを受けたいと思っている。現代は傍観者の時代で、ほとんど労することなしに楽しめる時代である。しかし、聖典は読む側で努力を払わなければ興味を与えてはくれない。ヤング大管長は、聖典を創造的な姿勢で身を入れて読む必要があることを示唆している。それは初めは容易でないかもしれないが、ひとたびそれができれば、聖典が生活そのものになってくる。

モルモン経の記録のある部分はバベルの塔と同じ位古いものだが、その教

それは家族から

アーサー・R・バセット





えは明日にも通じるほど新しい。歴史的背景は異なり、服装や環境は変わっても、人類はほとんど変わらない。古くからあった問題でも世代が変わればそれは新しいものとなる。モルモン経が、人生に真実関心を抱く者にとってかくも深い興味を与える理由は、そこにある。

永遠の問題を考え、異なる時代に別の場所で生活していた人々の見識を知る素晴らしい機会を提出する。予言者ジョセフ・スミスは、モルモン経を研究してその教えに従えば、他のどんな本を学ぶよりも神に近づくことができると言った。これは私たちのだれもが目すべき胸躍る約束である。

モルモン経には神学的な真理が豊富だが、それは神学の手引書をはるかに越えている。私たちはエルサレムの裏通りを歩き、広大な荒野を進み、大嵐の海を帆走し、青々とした自然にひたり、王の宮殿やみすばらしいあばら家を訪れる。また、焦点は国全体に当てられているが、家族生活や家族関係もいろいろとわかる。モルモン経は標準聖典の中で最も家族中心の本である。ただ旧約聖書の初めの部分だけは、家族の問題や喜びを同じ様に生き生きと描いている。

リーハイは偉大な予言者であると同時に、現代の父親と同じ問題に悩む親でもあった。私たちはリーハイのそのような面も頭に置いて、彼の考え方や問題を自分にひき比べてみる必要がある。私たちはよく、想像力を働かせずに聖典を読み、自分は何の努力もせず聖典だけに語らせようとしがちである。しかし聖典を手にとって、自分の体験と聖典中の人物の経験とを融合するならば、聖典はもっと価値あるものとなる。次にあげるニーファイの言葉は心強い助言である。「私たちの学問と利益になるように、すべての聖文を私たちのためと見立てた」(I ニーファイ 19: 23)

たとえば、親たちはモルモン経の中から、子供を持たない人なら見逃してしまうようなことに気がつくだろう。リーハイとニーファイのふたりの予言者は同じ生命の木の示現を見たが、ニ

ーファイが気づいた川の水の汚れにリーハイは気づかなかった。そのわけは容易にわかる。ニーファイは、示現を見ながら、「父は川の水のけがれを見ないほどその心をほかの物事にとらわれていた」(ニーファイが感じなかった家族の長としての責任に心が向かっていたのである。リーハイは示現の中で川を見てから、自分の家族のことが気になり始めた。妻とふたりの息子を見つけたので手招きし、さらにレーマンとレミュエルがいないのを心配して、迷える息子たちの行く方を捜すのに気を取られたため、示現の細かな点を見逃している。

一方ニーファイは父親ではなかったので、示現を違った視点から見る事ができた。父よりも示現の詳細に関心があり、父も同じように見ていながら家族のことに気を取られてよくは見なかった川の水の汚れという細かなことに注目している。

母親たちは、サライアが家や持ち物や友を後にし、人から幻にふける人と呼ばれた自分の夫への信頼をただひとつの頼りとして、荒野での未知の生活に踏み出したその苦労が理解できるに違いない。サライアが自分では示現を受けなかったことを忘れてはならない。彼女が荒野で窮境に立たされ、家や持ち物ばかりか、4人の息子まで失うのではないかと恐れて文句を言ったことも、母親なら同情できるだろう。(I ニーファイ 5: 1-7 参照)

父親たちも、妻の疑惑や心配によって自分の信仰を試されているリーハイの苦労が理解できるに違いない。主が自分を導いて下さっていること、また諸々の事柄がうまく行くだろうということを知ってはいても、それで折々の挫折や悩みが軽減されるわけではない。予言者としてのリーハイの信仰は、父親としての心配との間で絶えず葛藤を迫られていた。彼の役割の複雑さを認識すると、人生の様々な面に対する私たちの理解も深まる。予言者としてだけリーハイを見る人は、モルモン経が父親について教えていることの多くを見逃してしまう。

兄弟、姉妹はリーハイとサライアの

子供たちの間の不和から、自分の生活の関心事に目が向くだろう。ある人は、主の予言者である父を支持しない迷える兄たちがよく理解できないというニーファイの悩みに同感できようし、またある人は弟の「自分だけがいい子になっているような」態度にがまんならないと思って、レーマンやレミュエルに同感するだろう。またある人は、兄たちみんなから愛と尊敬を受けたい、兄たちを手本にしたいと思うのに、目に映るのは不和ばかりというヤコブの立場に共感するだろう。

ヤコブの少年時代の苦悩を忘れて彼の本を読む人は、家族についての説教が語りかける悲哀の多くを感じないままに読み過ぎてしまう。家族の衝突を見、恐ろしい航海を経験し、その上兄たちの争いを見、リーハイとサライアの最期を目にして悲しみ、リーハイの死後の家族の分裂を見てニーファイの妻や子供たちが懇願の祈りをするのを見たヤコブは、自分の説教を家族生活への深い洞察でしめくくっている。その後のヤコブの説教には、若い時代にはぐくまれた感受性が反映されている。

子が親の^{かみかみ}鑑であるように、モルモン経では家族が国の^{かみかみ}鑑である。従ってモルモン経を読むときに、その家族関係を忘れてはならない。家族関係は記事に深みと関心を添えてくれる。兄弟の中で争いが起き、ニーファイ人とレーマン人の間に戦闘が始まるとき、それらの発端となる戦いが他人ではなく、お互いよく知り合った親類縁者の間の戦いだったことを忘れてはならない。

シェレムがヤコブに反対を唱えに来たとき（ヤコブ7参照）、ヤコブは恐らくシェレムの両親か、そうでなくても少なくとも祖父母を知っていたことに注意してほしい。友人の息子が孫を見て、その親と比べてみない人はいないだろう。その息子が娘が反抗的であれば心配はどんなに大きいだろう。また友人、知人であるその親の名誉となる子であつたら、どんなにうれしいだろう。ヤコブとシェレムの関係を考えるときに、この話はさらに意味深いものとなる。

兄弟や姉妹の子、いとこの子、親友の子などが成長して立派な大人になっていくのを見るのは興味深いものだが、モルモン経でもそのようなことができる。モルモン経に出て来る人々は私たちと同じような問題を持っていた。従って私たちはそのことをいつも頭に置く必要がある。しかしその問題はまた、ある程度その家族的背景の所産でもあった。モルモン経ではそれらの家族を何代にもわたってたどり、家族に生じた問題を長い時代を通じて見て行くことができる。そのようなことがこうも立派にできる本は、そうそう歴史にない。

教会の責任ある役職を持つ父母の子は、イノスの話に特別な関心を抱くだろう。予言者を父と伯父と祖父に持ったイノスが、どんな思いで森に入ったか、その気持がわかるに違いない。だけれども大人になると自分で悟らなければならないことがある。イノスは自分の価値観を確立し、自分の生き方を定めなければならなかった。現在それと似たような状況にある人たちは、イノスのような祈りが今の自分に必要なことを感じるだろう。

時には、この重荷に耐えきれない人たちがいる。このような人は、一人立ちするには父の道から離れなければならないと考える。残念なことだが、教会指導者の子供が反抗する話を時折耳にする。彼らは仲間に自由な自分を立証しようとして、親の生き方に対して非難を始めるのである。そのような青年男女は、二代目アルマとモーサヤの息子たちの経験から学ぶ必要がある。王や神の予言者を父に持つ彼らは、反抗が幸福や真の達成への道ではないことを知った。

また別の親たちは、自分自身が若いときに反抗して、やがて悔い改めて福音に立ち返り、親となった今、自分の子供が同じ過ちをしているのを見ることだろう。二代目アルマは、父のアルマが若いときにノア王の悪い祭司だったことをどれほど知っていただろうか。父の若いときの経験をひきあいにして、自分の行動を正当化していただろうか。若い時代に問題があった父親は、反抗

したい気持や問題を自分でよく知っているが、迷う息子にどんな助言ができるだろうか。その問題を経験したことのある人は、アルマ父子の物語を興味なしに読み流すことができるだろうか。

祖父母が孫に親よりも大きな影響を及ぼすことが時々ある。モーサヤの息子たちがその例であるというつもりはないが、私は彼らの伝道の苦労を読むたびに、ベンジャミン王の最後の説教を思い出す（モーサヤ1-4参照）。また、モーサヤの息子たちはその説教の写しを持っていたのではないかと思うことがよくある。ベンジャミン王は、孫たちが結局は自分の価値観にならってその道を実践したことを大きな誇りに思ったに違いない。

モルモン経にはそのような家族関係についての記録がたくさんあるが、多くは想像にまかせられている。たとえば、父アルマの妻はだれだったか。アルマと一緒に荒野を旅して息子たちの反抗に苦勞し、アルマより先に死んで重荷を彼ひとりに残して行った女性はどんな人だったのだろうか。また、息子アルマが宣教師として主に仕えて家を長く留守にした間に、少なくとも3人の息子を育て上げた女性はどんな人だったのだろうか。聖典の中でも特に立派な人物のひとりに違いない。

モルモン経の最もおもしろい側面の数々が、その記録されていない部分である。私たちはその空間を埋め、述べられてはいないがまぎれもなく民の家族史であるその関係を再現することが必要になってくる。

モルモン経の中の家族が持っていた問題は永遠の問題であり、現代の私たちにぴったりあてはまる。それは人生普遍の面に照準をあてた問題である。事実モルモン経は現代の教科書である。しかし私たちがそこから多くのものを得るためには、創造的に読書するようにしなければならない。ヤング大管長が提言しているように、自分でそれを書いたかのように読むことである。そうすれば、予言者たちが理解していたことを理解するようになり、神のことについて何かしらを見出し始めるであろう。

質 疑 応 答

本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではない。



ブリガム・ヤング大学古代聖典学准教授
モンテ・S・ナイマン

モルモン経が「最も正確な書物」であるというのはなぜですか。またモルモン経には完全な福音がどのように載っていますか。

モルモン経を「地上で最も正確な書物」と言ったのは予言者ジョセフ・スミスです。（「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史記録」4：461）「正確」という言葉を「完全」と同義語に取って、モルモン経は文法も綴りも句読点も言葉づかいも完全であると考えの人がいます。モルモン経の初版以来、字句にたくさんの変更があるのを知って幻滅するのはこのような人です。しかし、もともとの原稿が口述によるもので、句読点なしに印刷にまわされたことを知れば、変更にも合点がいきます。予言者自身、2度の改訂を校閲して誤植を訂正し、またある文章をわかりやすく変えたりしました。

ですから、モルモン経を「最も正確な書物」と言ったとき、彼は印刷された文字や文章そのものよりもっと重要なことを言ったのです。それは後の言葉を読めばよくわかります。モルモン経は「私たちの宗教のかなめ石であって、人がその教えに従って最も神に近づくことのできる書物」なのです。（「教会歴史記録」4：461）全部を通して理解すれば、予言者の言葉は宗教的な教義の正確さを言っている

ことがわかります。モルモン経は完全な福音が載っているという意味で正確なのです。

では完全な福音とは何でしょうか。モルモン経には永遠の結婚、3種の光栄などに代表される回復された福音の教義がすべて載っているわけではないので完全な福音を載せているとは言えない、と異議を唱える人があるかもしれません。

しかし天使モロナイはジョセフ・スミスに、「金版に刻んだ一部の書物が埋められてあって、その中には古代の住民に救い主がお伝えになったままの完全な永遠の福音が載せてある、と告げたもうた」（ジョセフ・スミス2：34参照）と言いました。また教義と聖約の中で主は何度も、モルモン経には完全な福音が載せてあるとおっしゃっています。（教義と聖約20：9；27：5；35：17；42：12参照）

主はどういう意味で完全な福音と言っておられるのでしょうか。IIIニーファイ27：13-22でわかるように、イエス・キリストがこの地上に来られたのは、御父のみ旨を行ない、人類が悔い改めて神のみもとに立ち返ることができるように贖罪をするためでした。

ですから、救い主が示しておられる条件にかなえば、私たちは裁きの日に御父のみ前で罪なしとされるのです。その条件というのは、(1) 贖いの犠牲を信じる信仰を持つこと、(2) すべての罪を悔い改めること、(3) 主のみ名によって、主が言われた正しい方法と権威とによってバプテスマを受けること、(4) 聖霊を受けて聖められること。（これには清められ、すべての罪を克服することが含まれる。）以上の4つです。これでわかるように、完全な福音というのは、人類が再び御父のみ前に立ち返るために必要な計画、すなわち原則と儀式のことです。

聖書でも同じ原則が説かれていますが、モルモン経のように明確ではありません。ハロルド・B・リー大管長は、「モルモン経を読むこと以上に、自分自身を霊的に備えるに良いものはない。聖書には部分的にしか載ってない多くの教義が、モルモン経と教義と聖約と高価なる真珠に美しく述べられている」（「インブループメント・エラ」1969年1月号、pp.13、14）と言いました。

教義と聖約、高価なる真珠には、日の光栄の王国で昇栄を得るために必要な教義がさらに詳しく説かれていますが、基本的な教え、完全な福音はモルモン経に載っています。昇栄への道の第一歩は、これらの教えを理解することから始まります。

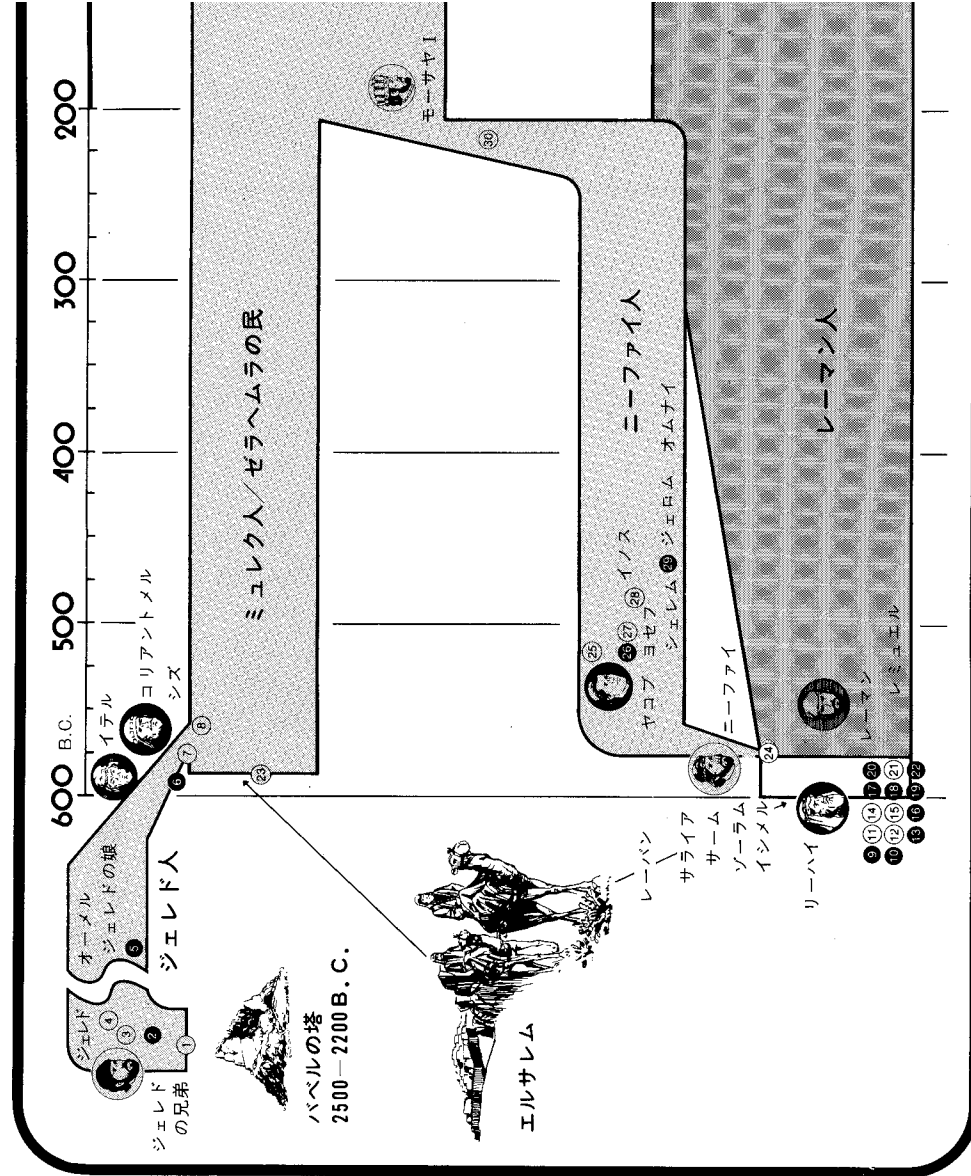
私は、モルモン経の教えを理解し、実践して、その生活を大きく変えた人々を大勢見てきました。モルモン経を研究しさえすれば、それが最も正確な書物であることがわかるでしょうし、またその教えを守るならば、神にもっと近づくことができるのです。

このページの続きは 465 ページにあります。このままの状態でも利用できますが、両方のページのとも切り離して縦にはり合わせると 1 枚の年表になります。

○は特に重要な出来事を表わす。



- ①バベルの塔—ジェレド人の言語は乱された。(イテル 1 : 33-37)
- ②ジェレド人、数隻の舟造って大海を渡る。(イテル 2 : 1-18)
- ③ジェレドの兄弟、肉体を受ける前のキリストを見る。(イテル 3 : 6-16)
- ④ジェレド人、約束の地へ向かう。(イテル 6 : 1-12)
- ⑤ジェレドとエキシの間の秘密結社。(イテル 8 : 7-19)
- ⑥予言者イテル、コリアントメル王以下ジェレド人に警告する。(イテル 12 : 1-5 ; 13 : 1-22)
- ⑦ジェレド人の滅亡。(イテル 15 : 13-32)
- ⑧コリアントメル—ジェレド人最後の生存者、ミュレク人に見出される。(イテル 15 : 32。オムナイ 20-22 も参照)
- ⑨リーハイ、エルサレムが破壊される示現を見る。(1 ニーフアイ 1 : 6-15)
- ⑩リーハイ、エルサレムを出て行くように命じられる。(1 ニーフアイ 2 : 1-4)
- ⑪リーハイ、家族と共にエルサレムを発する。(1 ニーフアイ 2 : 1-4)
- ⑫ニーフアイとその兄弟たち、レーバンの真鍮版を手に入れる。(1 ニーフアイ 3 : 4)
- ⑬レーバンの召使いゾーラム、リーハイの家族に加わる。(1 ニーフアイ 4 : 35, 38)
- ⑭インメルとその一家、リーハイ一行に加わる。(1 ニーフアイ 7)
- ⑮リーハイ、生命の木の夢を見る。(1 ニーフアイ 8)
- ⑯ニーフアイの示現と予言。(1 ニーフアイ 11-15)
- ⑰リアホナ発見される。(1 ニーフアイ 16 : 9-16)
- ⑱ニーフアイの号折れる。(1 ニーフアイ 16 : 18-32)
- ⑲インメル、(1 ニーフアイ 16 : 34-39)
- ⑳バウンテフルで船を建造する。(1 ニーフアイ 17 : 8-17 ; 18 : 1-5)
- ㉑約束の地への航海。(1 ニーフアイ 18 : 5-23)
- ㉒ニーフアイ、二組の版を作る。(1 ニーフアイ 19)
- ㉓ミュレク人、エルサレムを去る。(オムナイ 15, 16)
- ㉔ニーフアイとレーマン人に分裂する。(1 ニーフアイ 5)
- ㉕ヤコブ、ニーフアイの後を継いで予言者と



なる。ニーフアイの死。(ヤコブ 1)
 ②ヤコブの説教(ヤコブ 2-6)
 ③ジェレム、ヤコブに対抗する。(ヤコブ 7)
 ④イノス、罪を赦される。(イノス)
 ⑤レーマン人に福音を教えるようとした努力、むだに終わる。(イノス 14)
 ⑥モルモン 1、義しいニーフアイ人をニーフアイの地からゼラヘムラの地に導く。(オムナイ 12-19)
 ⑦ベンジャミン王、ゼラヘムラを治める。(オムナイ 23-25 ; モルモン 12-18)
 ⑧ゼニフ、ゼラヘムラを去ってニーフアイの地にニーフアイ人の居留地を確立する。(オムナイ 27-30 ; モルモン 9 : 1-9)
 ⑨ベンジャミン王の説教。(モルモン 2-5)
 ⑩モルモン 2、ゼラヘムラの王に即位。(モルモン 6)
 ⑪ゼニフの民、主の助けを得てレーマン人に勝つ。(モルモン 9 : 14-19 ; 10)
 ⑫ノア、ゼニフの後を継いでニーフアイ人居留地の王となる。(モルモン 11 : 1-15)
 ⑬アビナダインの使命と死。(モルモン 12-17)
 ⑭父アルマの改宗—モルモン泉でバプテスマを受ける。(モルモン 17 ; 18)

マを受ける。(モルモン 17 ; 18)
 ⑮ギデオン、ノアに反抗して立つ。(モルモン 19)
 ⑯ノア王、焼き殺される。(モルモン 19 : 19, 20)
 ⑰ノアの息子リムハイ、王となり、とらわれの身にあるニーフアイ人を治める。(モルモン 19)
 ⑱24枚の金版、発見される。(モルモン 21 : 25-27)
 ⑲アンモン、リムハイの民をゼラヘムラに導く。(モルモン 27 ; 22)
 ⑳父アルマとその一行、ヒーラムの地で奴隷の身となる。(モルモン 23 ; 24)
 ㉑アルマの民、奴隷の境遇から救い出され、ゼラヘムラの地に着く。(モルモン 24 : 13-25)
 ㉒父アルマ、ゼラヘムラの地のニーフアイ人をつかさどる大祭司に召される。(モルモン 25 : 15-21 ; アルマ 4 : 18)
 ㉓息子アルマとモルモン 4 人の息子の改宗。(モルモン 27)
 ㉔モルモン 4 人の息子、レーマン人への伝

道に旅立つ。(モルモン 28 : 1-9)
 ㉕息子アルマ、記録管理者となる。彼はまた初代の大判事であり、ニーフアイ人を治める大祭司でもあった。(モルモン 28 : 20 ; 29 : 42-44)
 ㉖判事治世の始まり。(モルモン 29 : 44)
 ㉗モルモン II と父アルマの死。(モルモン 29 : 45, 46)
 ㉘ニーフアイ、ニーフアイ人の間に祭司の偽善を教える。(アルマ 1 : 1-15)
 ㉙アムリサイ、ニーフアイ人の王になろうとする。(アルマ 2 : 1-31)
 ㉚息子アルマ、ニーフアイ人に大判事の職を譲る。(アルマ 4 : 11-20)
 ㉛息子アルマとアムレク、アモナイハの民に伝道する。(アルマ 8-10 ; 12 ; 13)
 ㉜ゼズロムの改宗。(アルマ 11 : 14 ; 15)
 ㉝アモナイハの町、レーマン軍に滅ぼされる。(アルマ 16 : 1-12)
 ㉞息子アルマとモルモン 4 人の息子の再会。(アルマ 17 : 1-4)
 ㉟ラモナイ王とその家の者の改宗。(アルマ 17 : 18 ; 19)



おだやかな心



金ばんにきざまれた むかしの文字を
ほんやくするには、神さまの力がひつよ
うでした。ジョセフ・スミスは、ウリム
とトミム、それから「けいじの石」とい
う石をもっていました。

ジョセフがほんやくをはじめると、「け
いじの石」の上に、文字がうつし出され
ました。ジョセフがそれをよみ、だれか
が書きとりました。正しく書きとると、
文字はきえて、またべつの文字が出てき
ました。まちがって書きとると、文字は
きえずにのこっていました。

ほんやくには、このような石のほかにも
ひつようなものがありました。それは、
おだやかな心でした。

あるとき、ジョセフは、家のことでエ
マとけんかをしました。そのあとで、ほ
んやくをするために、二かいのへやへ行
きました。そこには、文を書きとるやく
目の、デビッド・ホイットマーとオリバ
ー・カウドリがまっていました。ジョセ
フは、ほんやくをはじめましたが、ひと
ことも、やくすことができませんでした。
なぜできないのか、ジョセフにはわかっ
ていました。あまりにも、この世のこ
とに、心をうばわれていたのです。ジョセ
フは果樹園に行って、いのりました。1
じかんくらいたって、家にかえり、エマ
にあやまりました。そうすると、心がお
だやかになり、すらすらと、ほんやくす
ることができました。

デビッド・ホイットマーはいいました。

「主は、ほんとうにきびしいお方です
ね。わたしたちが、かんぜんに正しいこ
とをしていなければ、けっして、けいじ
をあたえてはくださらないのですね。」

エリックは、なにひとつちゃんとできませんでした。おまけに、しっばいばかりしていました。

ある朝のこと、エリックは、きょうこそ、じょうずにやってやろうとおもいました。きちんときがえをして、ベッドをきれいにして、パジャマをたたんで、おしなれにしまいました。朝ごはんのとき、お母さんがいいました。「エリックちゃん、おさとうをとってちょうだい」 エリックは、おさとうをとって、お母さん

にわたそうとしました。そのとき！ ひじがジュースのコップにあたって、コップをひっくりかえしてしまいました。

「どうして、おまえはなんでも、ちゃんとできないんだい？」 お兄ちゃんのアランがいました。エリックの目から、なみだがポロポロあふれました。

ごはんがおわると、エリックはおにわに出て、ぼんやりしていました。へいによりかかって、かんがえました。「きょうこそじょうずにやろうとおもったのに……ぼく、やっぱりだめだ。」 くよくよかんがえているうちに、エリックは「そ



しっばいばかりの エリック





うだ！」とおもいました。「そうだ、何もしなければいいんだ。何もしなければ、しっばいすることはないんだ。」われながらいいかんがえだ、とおもいました。

エリックは、日なたのあたたかいところにすわりました。ライラックの花のにおいがただよい、お日さまが、キラキラとかがやいて、とてもよい気もちでした。ふと見ると、アリが大きなはっぱをはこんで行きました。またしばらくすると、ことりが耳もとで、さえずりました。

エリックは、かんがえました。「見ることも何かをしていることになるし、きくことも何かをしていることになるな。見ちゃいけないんだ。そして、きいてもいけないんだ。」エリックは、ためいきをつきました。「そうだ、いきもしちゃいけないんだ。むずかしいなあ。それに、

つまんないなあ。」しばらくすると、「おひるごはんよ」という、お母さんのこえがきこえました。エリックは、もうやめた、とおもいました。そして、お母さんのところへはしっていきました。

「何をしていたの。」お母さんが、ききました。

「何もしなかったの。何もしなければ、しっばいもしないでしょ。でも何もしないって、むずかしいね。どうしてもできなかったよ。それに、つまらなかった。」

「そう？ それで何をしたの？」

「いろんなものを見たし、いろんな音をきいたの。何かをするほうが、たのしいね。ぼく、しっばいしてもいいや。」

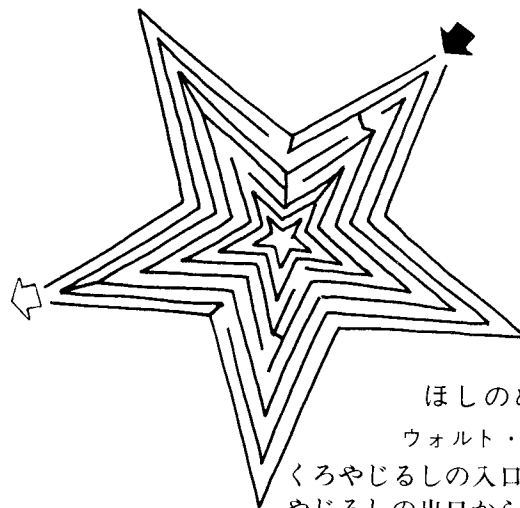
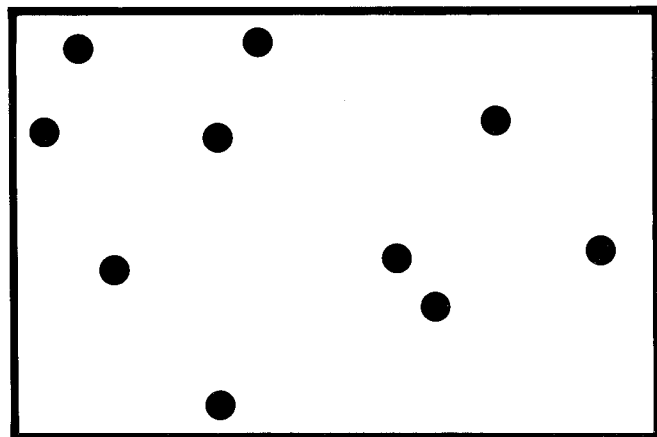
お母さんは、にっこりしていいました。「きっと、今に、何でもちゃんとできるようになるわ。エリックちゃん。」

おもちゃばこ

あたまのたいそう

リチャード・ラタ

4本のちよくせんをつかって、10コのくろまるをひとつひとつ、切りはなしてください。



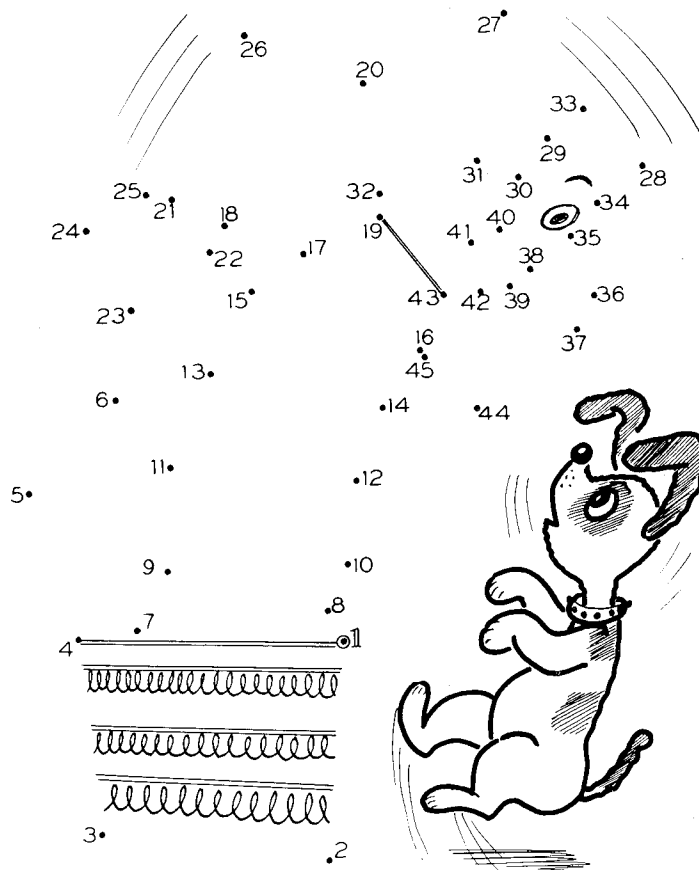
ほしのめいろ

ウォルト・トラッグ

くろやじるしの入口からはいって、白やじるしの出口から、出てください。

てんをむすんでみましょう

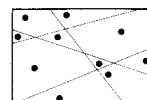
ロバータ・フェアラル

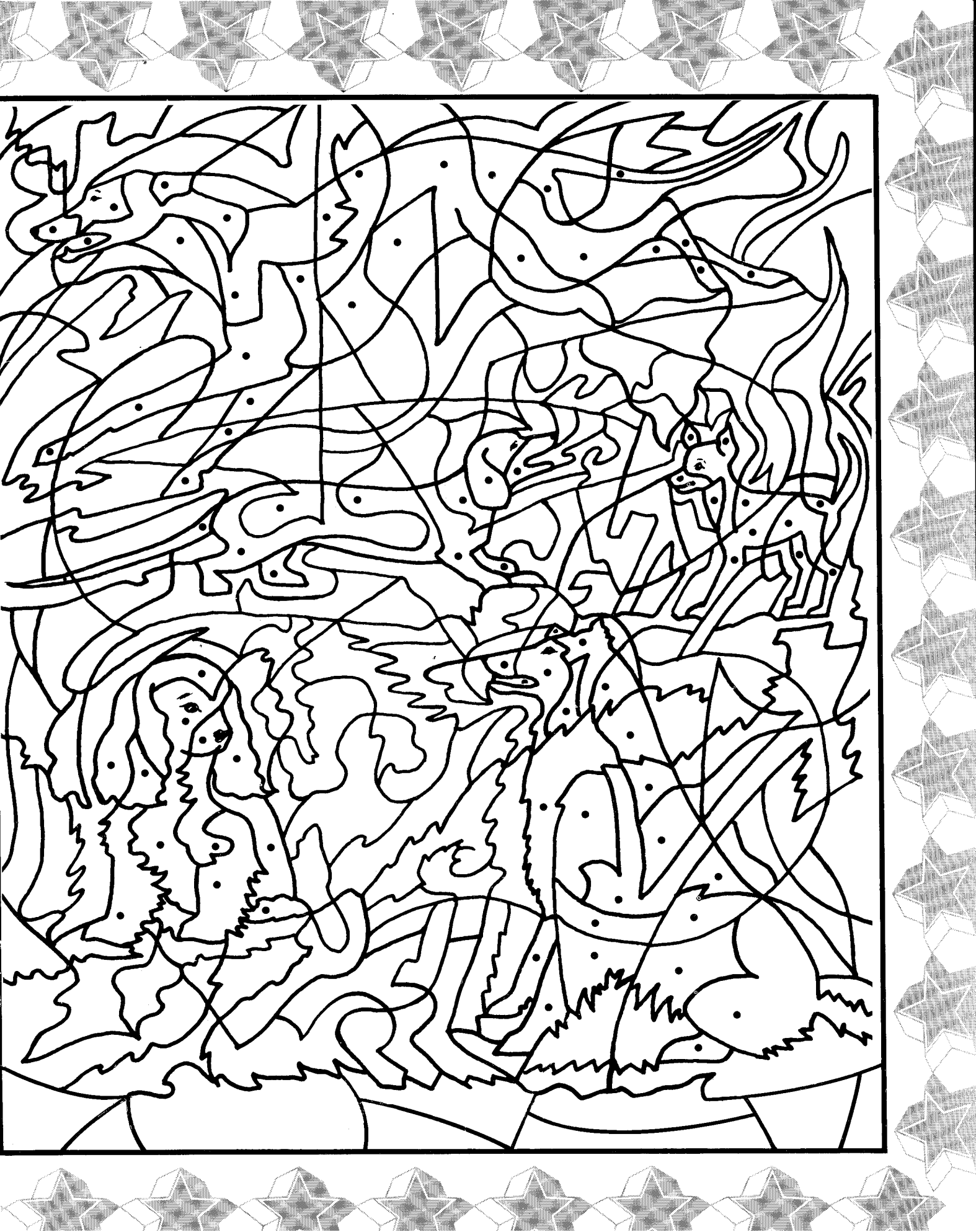


ねえ、わらってごらんったら

ぬりえパズル

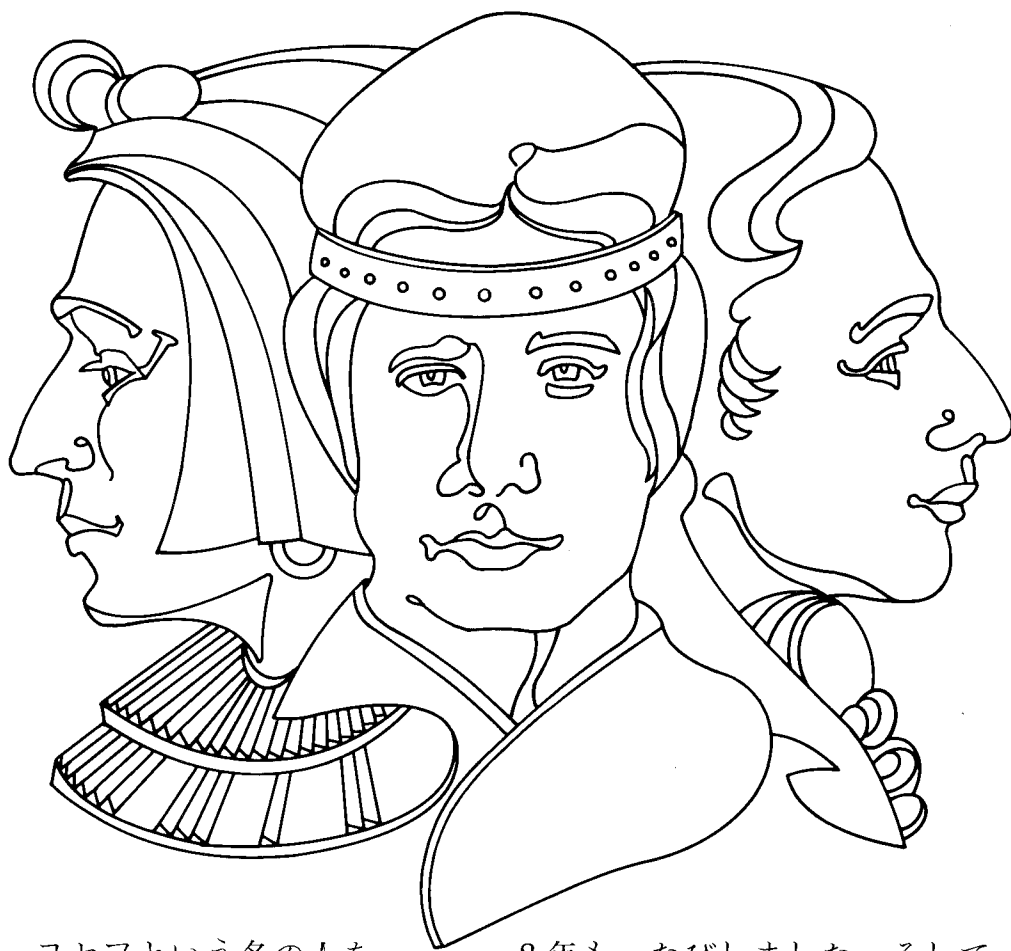
てんのところを、ぬりつぶしてみましょう。
どんな犬がいるかな。







ヨセフ



みなさんは、ヨセフという名の人を、
何人知っていますか。リーハイの子のヨ
セフ、エジプトにうられたヨセフ。そう
です、ジョセフ・スミスのジョセフとい
う名もむかしふうによむとヨセフですね。



リーハイは、主にみちびかれて、家ぞ
くといっしょにエルサレムを出て、やく
そくの地へ行きました。とてもたいへん
な、たびでした。けものをとったり、た
べものをさがしたりしながら、あれのを

8年も、たびしました。そして、主がお
しえてくださるとおりのほうほうで、ふ
ねをつくり、うみをこえて行きました。
やくそくの地について、しばらくすると、
リーハイは年をとり、しぬばかりになり
ました。リーハイは、レーマン、レミュ
エル、サーム、ニーフアイ、ヤコブ、そ
してさいごに、すえっ子のヨセフをしゅ
くふくしました。ヨセフには、エジプトに
うられたヨセフのはなしをしました。

ヨセフはとてもお父さんに、かわいが

られました。それをねたんだヨセフのお兄さんたちは、ヨセフをエジプトにうってしまいました。でもヨセフは、いつも主につかえ、主のみこころにかなうことをし、パロのつぎにえらい人になりました。そしてききんのときには、大ぜいの人々をすくいました。

ヨセフはじげんで、たくさんのことを見ました。むかしこの地上に生まれてきた人々、そしてこれから生まれてくる人々を見ました。リーハイの子のヨセフのすがたも見たことでしょう。エルサレムのみやこがほろぼされるのを見ました。主は、ヨセフの子孫がみんなほろびてしまうことはない、とやくそくされました。そうです、リーハイは、このヨセフの子孫なのです。

ヨセフは、ふたつのきろくも見ました。ひとつは「ヨセフの木」とよばれていました。これはヨセフの子孫が書いたものでした。もうひとつは「ユダの木」とよばれていました。これは、ヨセフのお兄さんのユダの子孫が書いたものです。このふたつには、神さまがよげんしゃにかたいたいましめが、ぜんぶ書いてありました。

ヨセフは、^{わじつ}末日に生まれる、すばらしいよげんしゃのすがたも見ました。この

よげんしゃは、「ヨセフの木」を、だれでもよめるようにほんやくしました。このよげんしゃの名もヨセフで、そのお父さんの名もヨセフでした。だれのことかわかりますか。そうです、ジョセフ・ミスですね。そして、「ヨセフの木」というのはモルモンけいです。



リーハイは、さいごにヨセフにこういいました。「おまえの子孫は、あのきろくにしたがって、せいかつするだろう。そしておまえの子孫がたえてしまうことは、ないだろう。」

そして、ヨセフはまだ小さかったので「お兄さんとニーファイのことを、よくきくようにしなさい、そうすれば、リーハイのいったことは、みんなほんとうになるだろう。今お父さんがいったことをよくおぼえておくんだよ。」といいました。リーハイは、かぞくひとりびとりに、しゅくふくをあたえると、しんで神さまのもとへ行きました。



3人のヨセフは、どの人も大せつなはたらきをしましたね。この3人のヨセフについてかんがえ、神さまのめぐみを、よく思いおこしてみましよう。

モルモン経の物語は

エリザベス・F・ベイツ

雄々しく

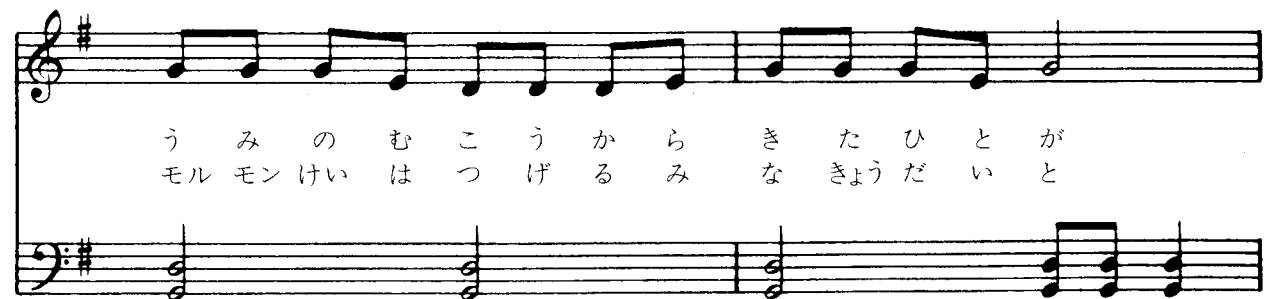
エリザベス・F・ベイツ



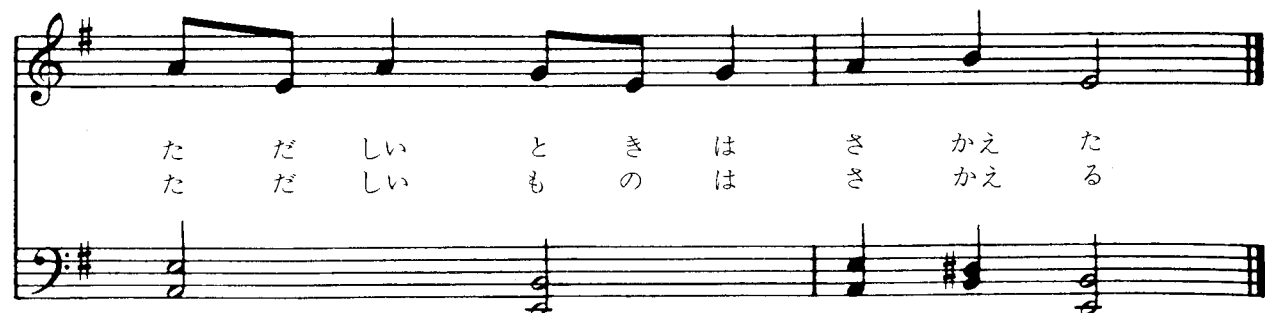
1. モ ル モ ン け い の も の が た り は
2. じ ゆ う を も と め て き た た み と



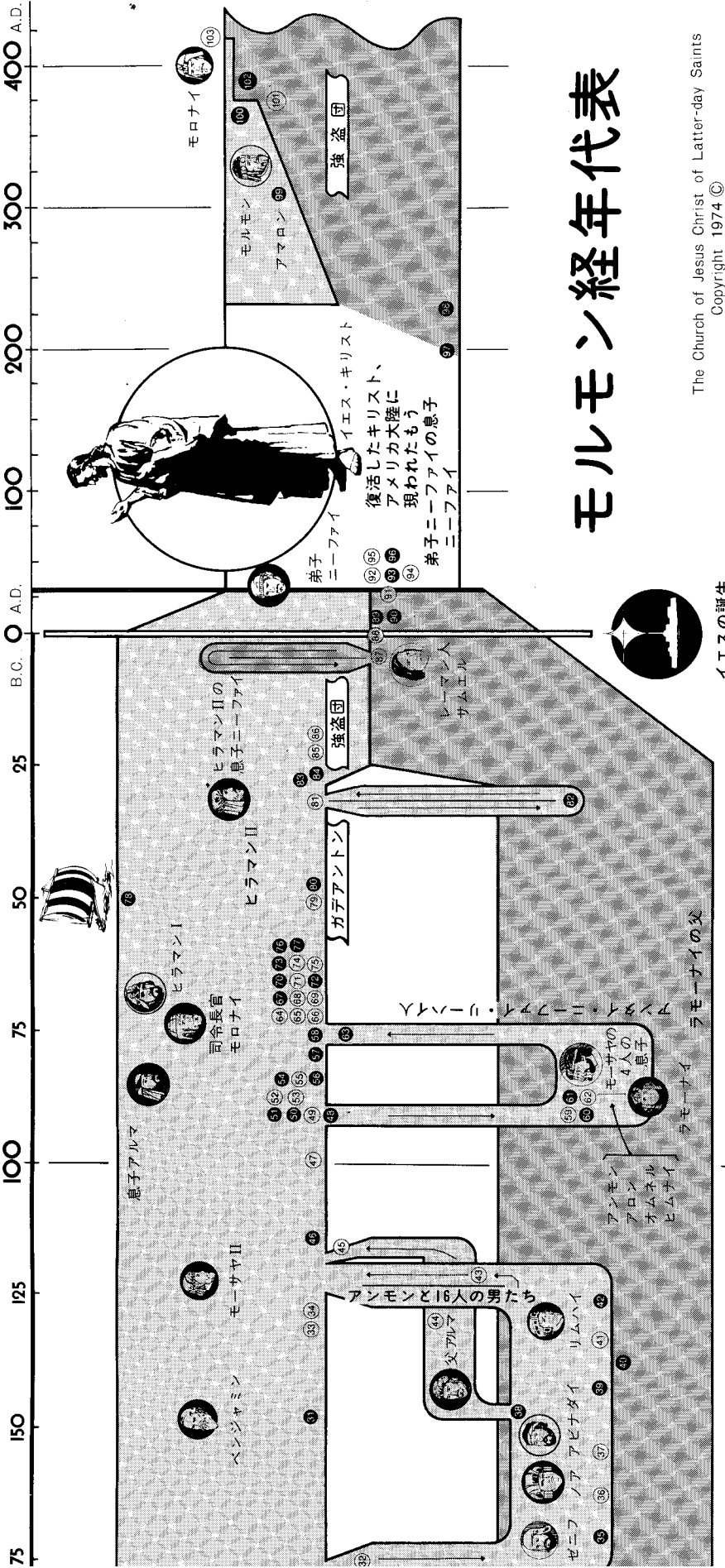
レ ー マ ン じ ん の ふ る い れ き し
レーマンじんもこのちはうけいれた



う む の む こ う か ら き た ひ と が
モルモンけいはつげるみなきょうだいと



た だ しい と き は さ か え た
た だ しい も の は さ か え た



モルモン経年代表

The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints
Copyright 1974 ©

イエスの誕生
(ベツレヘム)

- ① アンモンとラモーナイ、ラモーナイの父と出会う。(アルマ22)
- ② アロン、ラモーナイの父とその家族に福音を教える。(アルマ22)
- ③ アンタイ・ニーファイ・リーハイ人の改宗(アルマ23-25; 27)
- ④ アンタイ・ニーファイ・リーハイ人、ジェリシヨンの地を与えられる。(アルマ27)
- ⑤ コラホル、キリストに反対し、おしになる。(アルマ30)
- ⑥ 息子アルマ、伝道隊を率いてゾーラム人に福音を教える。(アルマ31-35)
- ⑦ 司令長官モロナイ、セラヘムナを打ち破る。(アルマ43; 44)
- ⑧ 息子アルマ、姿を消す。(アルマ45; 15-19)
- ⑨ アマリカヤ、ニーファイ人の王になるうとする。(アルマ46; 1-10)
- ⑩ 自由を愛するニーファイ人、自由の旗のもとに集まる。(アルマ46; 11-37)
- ⑪ 司令長官モロナイ、自由を守るためニーファイの民を備えさせる。(アルマ48-50)
- ⑫ 司令長官モロナイ、反抗的な王政を打ち破る。(アルマ51)
- ⑬ テアングム、アマリカヤを殺す。アモロン、アマリカヤの後を継ぐ。(アルマ51; 33, 34; 52; 3)
- ⑭ 司令長官モロナイとリーハイとテアングム、占領されていた幾つかの都市を取り戻す。(アルマ52-55)
- ⑮ ヒラマンIと強者たち、ニーファイ人を援護する。(アルマ53; 56-58)
- ⑯ 司令長官モロナイとベホーランの書翰。(アルマ59-61)
- ⑰ レーマン人がニーファイの地から追い払われ、平和が確立する。(アルマ62; 12-52)
- ⑱ 司令長官モロナイとベホーランの死。(アルマ63; 3; ヒラマン1; 2)
- ⑲ ハゴツ、船を建造して航海に出る。(アルマ63; 5-8)
- ⑳ キンクメ、秘密結社を組織し、ベホーランの息子を殺す。(ヒラマン1; 1-12)
- ㉑ ガデアントン、キンクメーの首領となる。(ヒラマン2)
- ㉒ ニーファイとリーハイの努力の結果、数千人のレーマン人が改宗する。(ヒラマン5)
- ㉓ レーマン人、ニーファイ人よりもはるかに養ひ、ニーファイ人に宣教師を送る。(ヒラマン6; 1-6)
- ㉔ ニーファイ人とレーマン人の間で自由に交易が行なわれる。(ヒラマン6; 7-9)
- ㉕ ガデアントン強盗団、ニーファイ人政府の支配権を奪い取る。(ヒラマン6; 15-41)
- ㉖ ヒラマンIIの息子のニーファイ、大判事の増徴を宣言する。(ヒラマン7-9)
- ㉗ ヒラマンIIの息子のニーファイ、大いなる力を授けられる。(ヒラマン10; 11)
- ㉘ レーマン人サムエル、ニーファイ人に警告する。(ヒラマン13-15)
- ㉙ 救い主降臨のしるしが示される。(IIIニーファイ1)
- ㉚ ラコニアとゲデアンハイ、ゲデアントン強盗団を破る。(IIIニーファイ3; 4)
- ㉛ ニーファイ人、部族に分裂。(IIIニーファイ7)
- ㉜ キリストの死のしるしが示される。(IIIニーファイ8)
- ㉝ イエス・キリスト、ニーファイ人に現れたもう。(IIIニーファイ11; 1-17)
- ㉞ イエス、ニーファイ人の中から十二弟子を選ばれる。(IIIニーファイ12; 1)
- ㉟ イエス、福音を教え、教会を組織される。(IIIニーファイ12-27)
- ㊱ キリストの伝道に続く平和の時代。(IVニーファイ)
- ㊲ 3人のニーファイ人、身を変えられる。(IIIニーファイ28)
- ㊳ 少数の者が反乱を起こし、レーマン人と呼ぶようになる。(IVニーファイ20)
- ㊴ 国民、ニーファイ人とレーマン人に分裂。(IVニーファイ35-42)
- ㊵ アマロン、記録をモルモンに託す。(モルモン1; 1-4)
- ㊶ モルモン、モルモンの版以外の記録をみな隠し、モルモンの版は息子のモロナイに伝える。(モルモン6; 6)
- ㊷ ニーファイ人とレーマン人の最後の戦い、クモラで行なわれる。(モルモン6; 7-15)
- ㊸ モロナイ、ひとりさまよえないがジェレド人の歴史を抄録する。(モルモン8; イテレル1; 1, 2; モロナイ1; 1)
- ㊹ モロナイ、別れの言葉を記し、モルモンの版をクモラの丘に隠す。(モロナイ10)

日々の恵み

福音に従い、主を愛する日々の経験は、一つ一つ末日聖徒の胸に刻まれていきます。これはだれもが持っている物語です。証を強くした経験、祈りが答えられたこと、神権の祝福、愛する家族や友人の受けた靈感、教会の活動を通して得た報いなど、あなたの経験をみんなで分かち合しましょう。宛先は東京都港区南麻布5-10-25 中正堂会館 末日聖徒イエス・キリスト教会翻訳事業部 八木 沼修一

私の心を変えた

アルマ書32章

エルマ・J・バーベリ

私は気むずかし屋でした。若いときのある苦い経験によって、人が信じられなくなったのです。私がいつでも文句を言うので、みんなは私をなかなか受け入れませんでした。宗教は、弱者の逃げ場だと思っていました。私は自分の能力に強いプライドを持っていて、神がいるかいらないかなど、いっこうに無頓着でした。

そんなあるとき、会社に新しい秘書が来ました。彼女は快活明朗な社交的な性格で、私とはまるっきり違っていました。彼女はうぬばねがなく、だれかが支えてあげなくてもちゃんとやって行けそうでした。心に強い力があって、まるで光のように、彼女から何か特別なものが発散していました。彼女は末日聖徒でした。

私たちは良い友だちになりましたが、彼女をもっと知るようになってから、私は自分の人生が何と空虚なものか、知り始めたのです。宗教が彼女の生活に非常なウェイトを占めていることにも気がつきました。それが彼女の「何か特別なもの」とでも言えるのでしょうか。彼女は私に宗教のことをあまり話しませんでした。後でわかったことですが、彼女は、私は教会に入らないものだと、勝手に決めつけていたのです。たしかに私の態度や生活は、そう考えられてもしかたのないものでした。しかし、彼女がほんのちょっとモルモニズムの話をしたのが、私の興味を引きしました。

私は自分で研究すると心に決めました。論理的な思考や客観的な調査には自信があったので、公共図書館へ行き、モルモニズムに関して賛成反対2冊ずつの本を借り出しま

した。（かたよった見方をしたくなかったわけです。）ところが読み始めると、奇妙なことが起きました。それまで宗教に関して受け入れられていた点の全部が、モルモニズムの中にはなかったのです。その上モルモニズムには新しい概念と教義があって、しかもそれが真実のように、何やらなじみやすいように思えました。

これはモルモンの哲学をひょっとして受け入れるかもしれないぞと、私はろうばいしながらもそう感じ始めました。4冊の本の中にはモルモン経のことがいろいろ言われていましたが、たいていはモルモン経の擁護か、モルモン経の起源に対する攻撃でした。内容に関したことはほとんど出ていませんでした。反対派の著者がひとり、モルモン経は実に珍しい本だ、なぜなら、読んだ人は下劣きわまりない明らかなペテンとを感じるか、さもなければ神の靈感によって書かれたとを感じるかのどちらかだから、と言っていました。私は、その本を自分で読んで、何がそんなに珍しいのか知ろうと決心しました。

読み始めると、また別の何かが起き始めました。わけのわからない経験を幾つかしましたが、それはみんな悪い気



持ではありませんでした。後になって、読んでいたものが真実だと聖霊が私に証していることに気づいたのです。私は読み進みました。そしてアルマ書32章まで来ました。それは私にとって非常に大切な章でした。17節を読むと「もし天からのしるしを自分に見せてくれるならば確に知って信じようと言う人は多くある」と書かれていました。

これだ！と私は思いました。それがちょうど私の考えていたことです。もし神があるなら、どうしてみんなに姿を見せないのだ！ それから、私はアルマの返答を読みました。

「しかし、このようなことは信仰であるか。いや、これは信仰と言うことではない。なぜならば、もし人が物事を知っているならばこれを信ずる必要のあるわけがない。すでにこれを知っているからである。」(18節)

ちょっと待て、これはどういうことだ。私は何べんもそこを読み返しました。そのことを以前はそんなふうにしたことがなかったのですが、それはいかにも明らかな真理でした。私は、これは自分の人生にとってつものかわり合いを持つぞといった、不思議な気持ちを感じました。次に強烈な印象を受けたのは27節でした。

「しかし、あなたたちがもし目をさましてふり立ち、その能力をつくして少しなりとも信じながら(大きな信仰ではなく、少しの信仰で)私の言葉を実際にためしてみるならば(私はためてみるのが好きだ。そうすれば知ることができる。それは確実だ)、たとえ信じようとする望みを起すだけでもよい。しかし、私の言葉の一部分でも受け入れるほどの信仰ができるようになるまで、この望みを育ててゆけ」

考え方やそれまでの生活はどうであれ、私は本当に信じたいと思いました。

アルマは続いて、ためてみることを説明していました。彼は福音を種にたとえました。心に種をまいて、福音に従おうと努力しながらそれを育てれば、種は大きくなって心の中でふくらみ、あなたはそれが良いものであることを知るだろうと。

モルモン経を読み終えると、私は自分のモルモン経が欲しくなりました。そこで宣教師に電話をすると、彼らは大喜びで話しにやって来ました。私は6回レッスンを受けた後、決心をしなければならませんでした。証はあったのですが非常に弱いものでした。それが私の支えとなるかどうか分かりませんでした。しかし私はアルマの言葉に従って試してみようと思いました。バプテスマを受けて、1年の間、絶対従順になってみようと思ったのです。試してみればそれに越したことはない。もしだめなところで、大して失うものもないさ。

それが5年前でした。知恵の言葉を守り、什分の一を納め、福音を知るようになってから、人々は聞いたことがないようなことを言い始めたのです。私はいつも楽しそうで、

親切で、人に好かれ、良い人だと言われ、重んじられました。全く突然に、だれもが自分の友だちのように感じられ、私は思いもよらない形で成長し始めました。それから3年してひとりの女性にめぐり会い、結婚し、子供を育て、ついに理想の家庭作りを始めたのです。

私は、福音が人生を変えること、そしてただ福音の原則に従おうと努力さえすれば、天父は私たちを豊かに祝福して下さることを知っています。

サウスダコタの

スウェーデン人とモルモン経

ジェラルド・E・ジョーンズ

サウスダコタ州のゲティスバーグは人口2千人足らず。その郡立図書館にだれがモルモン経を寄付したのかは知るよしもありますが、教会のゲティスバーグ支部が現在あるのは、その本と、好奇心旺盛な背の高いやせたスウェーデン人のおかげなのです。私の人生が彼の影響を受けて、もう30年になります。

カール・アイバー・サンドバーグは、十代のときに未来を求めてスウェーデンを離れ、アメリカ北西部にやってきました。木こり部落のすさんだ生活に疲れ、農業に意欲を燃やした彼は、サウスダコタ州のポッター郡に入植し、一時は人里離れた掘建小屋の独り住まいもしました。しかし彼は懸命に働いてお金をため、すぐに家を建て、土地を持ちました。

アイバーが宗教について考え始めたのは、春になって穀物が芽を出すのを観察し、農場の動物たちの誕生の奇跡を見たときでした。彼は聖書にその答えを求めました。「日に何回か地所を耕してまわり、仕事が急ぐものでなければ、家にかけ込んでちょっと読書するという日課でした。」「小説ならばわざわざ帽子を脱ぐこともなかったが、聖書を読むときは脱帽しました。神聖な本だと思ったもので」と、アイバーは語っています。

神やみ業についてもっと知るには教会に入る必要があると感じた彼は、家から25キロ圏内にある5つの教会に行き、牧師たちと宗教の話をしました。しかし満足するどころか失望するばかりでした。だれも、新約聖書に出ているような教会を求めて行った彼の期待に答えてはくれませんでした。教える教義は真実と思われませんでした。アイバーは真実の探求に燃えて、今度は郡立図書館へ行き、見つかり次第全部の宗教書を読みあさりました。キリスト教はすぐに見限って、次はコーランを読むと思いました。すると司書が、もう1冊「異教」の本があって、読んだ人は退屈な本だと言ったけれど読んでみないかと勧めました。アイバーはモルモン経を家に持って帰りました。

「モルモン経を読み出しました。小説を読み始めたよう

な気負わない感じでした。しかし何ページも行かないうちに、これは素晴らしい本を見つけたものだと思います。涙があふれ出て頬を濡らし、この上なく心地よいスピリットがあるように感じました。私は初め、帽子をかぶったままで読んでいましたが、すぐに、このような本は脱帽して読むべきだと感じました。

今でも思い出しますが、モルモン経を3日読んで、何か素晴らしい靈感を受けたようでした。自分の知る限りでは真実の本のように思えましたが、それでもどのみち矛盾が見つかるかと思っていました。

私はその本が素晴らしいと思ったので、宗教心のある近所の人のところへ持って行きました。さぞや興味を持っただろうと思いきや、3日してまた行ってみると、彼はその本をけなし、聖書の二番せんじだと言うのです。私は本を図書館に返しました。そして夏中ずっとそのことを考え続けましたが、それでもその本は聖書と同じように矛盾が見つかりませんでした。

その年は弟のスウェンが手伝いに来てくれていましたが、秋の土曜の晩に彼がゲティスバーグに行く支度をしていたとき、図書館に寄って司書からモルモン経を貸出してもらうように頼みました。翌日は日曜日でしたが、家畜にえさをやってからすぐ、そうやって借りたモルモン経を、朝から読み始めました。そして夜寝るまでに全部を読み上げました。このときは以前よりもっと感動しました。図書館に返す前にもう一度読み通しましたが、私はその本が真実だということがわかりました。

図書館にはモルモンイズムについての本はそれだけでしたが、ソルトレーク・シティーのデゼレト書店を紹介してくれたので、それからの2年というもの、アイバーは何冊も本を注文してすっかり改宗し、教会の教義に非常に詳しくなりました。しかし彼はひとりの末日聖徒にも会ったことがなく、ついに自分でソルトレーク・シティーへバプテスマを受けに行こうと決心しました。

旧式のフォードでワイオミングの荒野を何キロも旅するのは勇壮なところか、ときどきストップしては、車のわきで先へ進む力を祈りました。彼が初めて会ったモルモンは、ユタ北部の給油所にいた不活発なスタンドマンで、ここでまた、先へ進むべきかどうか迷いました。しかしその翌朝、遂に彼はソルトレーク・シティーに到着し、テンプルスクウェアの外に駐車して、夜警に教会へ入りにやってきたと話しました。その日曜日、アイバーは生まれて初めての末日聖徒の集会で証をしました。彼はこう言っています。「聖徒たちが証をするのを聞いて、どんなにうれしかったか。とうとう本当の兄弟姉妹たちと会えたんです。集会が終わると、ほとんど全員が握手してくれました」

1934年10月1日にバプテスマを受けたアイバーは、しばらくの間ソルトレーク・シティーで働きました。しかし長老に聖任されてからは、サウスダコタへ帰って教会を建て

る手伝いをしようと決心し翌春の種まきに間に合うように出発しました。

アイバーは北部中央諸州伝道部の伝道部長から自宅で日曜学校を開く許可を得、間もなくミルドレッド・ネルソンという美しい教師を改宗に導き、彼女と結婚しました。その後近所の人たちが福音を受け入れ始めました。この頃に、私の家から8キロほどの所で始まった風変わりなその事件を、近所の人が私の父に話してくれました。父は、たいていの教会は社交クラブのようなもので、女は最新流行の服を見せびらかしに、男はその週の自分の仕事のために正直者ぶって出かけると考えていました。そこで、「その変わり者の無学なスウェーデン人に少々教えてやろう」と腰を上げたのです。

私たちの第1回目の集会はひと部屋の学校に20人くらいの人を集めて行なわれました。半分は福音を研究している人たちでした。アイバーのなまりがひどく、私には何を言っているのかほとんどわかりませんでした。スピリットは感じました。それは胸を熱くし、心を奮い立たせるものでした。父と私はそのことでさんざん議論しました。そして父は1年もたたないうちに大草原の池でバプテスマを受けました。それから遅れて、残りの家族もバプテスマを受けました。

1948年に25人の改宗者でゲティスバーグ支部が組織されると、アイバー・サンドバーグが初代支部長になり、何年も前に教会員として確認されたときの約束が成就されました。私の父は第一副支部長でした。

その支部は、伝道部の中でも特に珍しい支部でした。全員と言っても良いくらいが農家の人たちで、大学教育を受けた人が大勢いました。たいてい夫や父が先頭に立って、家族全員で教会に入るのがほとんどでした。神権指導者はたくさんいて、大半の女性はピアノや音楽の指揮ができました。

サンドバーグ兄弟の影響を受けた良い例は、テキサス出身のトンプソン一家です。トンプソン夫妻はどちらも高等教育を受け、高校で教えるかたわら農業をやっていて、プロテスタント教会の活発な信者でした。それが、5人の息子とともどもサウスダコタに農場を持つと決意したのです。彼らがハイウェイを走っていると、ゲティスバーグから13キロほどの所の小さな教会が目にとまりました。一家は好奇心と、トンプソン氏がテキサスで見た夢の影響もややあって、アイバー兄弟と面識を持ちました。彼らはアイバー兄弟の間違いを悟らせようとしたのですが、1年も経たないうちに、支部の活発な会員になりました。

ゲティスバーグ支部が今あるのも、ひとえにアイバー・サンドバーグと1冊のモルモン経のおかげです。アイバー兄弟が1949年に小型トラック事故が原因で亡くなった日、私は支部で最初の宣教師に召され、伝道に出ました。それ以来、大勢の人が世界中に伝道に行きました。アイバー兄弟の5人の息子も、奥さんのミルドレッド姉妹も。まだ小

さな支部ですが、今では18家族で55人以上の教会員がいます。アイバー兄弟と彼の教えによって改宗した人が、支部長や監督やいろいろなワード部、ステーキ部の役員となり、今もそれぞれの場所でキリストの福音を教え続けているのです。

読む夢を見た私の祖母

(ラセッタ・マリア・マーマー・アトキンソンの手紙から)

私の祖母のリディア・ダウナー・ゲイツ(1810年生まれ)は、子供の頃、ある朝ベッドから起き出して、自分はひと晩中夢の中で1冊の本を読んだと家族に話しました。本の名前も読んだ内容も思い出せませんでした。本の名前ははっきり覚えていました。

リディアはその翌朝も、また寝ていてその本を読んだ、きのうの続きをひと晩中ずっと読んだと言いました。読んだことは何も覚えていないのですが、本には家族全員にとってとても大切なこと、大きな価値のあることが書かれているという強い印象を受けたそうです。

その晩もその次の晩もその本が夢に現われて、全部読み終えるまでそれは続きました。時間がかかったのも、その間リディアは毎朝寝不足で、まるで徹夜したように憔悴していました。

彼女は本の様子を、大きさや形、装丁から、ひと目見ればそれとわかるほどに詳しく家族に説明しました。家族の人は立寄る本屋のあちこちでその本を捜し、本売りがやって来れば、リディアの説明に合う本はないかと注意していました。リディア自身も、よその家にありはしないかといつも捜していました。その中には家族全部にとって大切なことが書いてあるという思いが、リディアの頭を離れませんでした。

それからしばらくして、リディアの叔母が旅行に出るので、家に来てその間留守番をしてほしいと頼まれました。リディアは大喜びで承知しました。叔母は出かけるときに、「リディア、留守の間に本でも読みたくなったら、あのタンスの中にちょっとあるわよ」と言って、寝室の木のタンスを指さしました。

リディアは仕事が終わるとすぐに、タンスの所へ行って本を捜しました。1冊に目を通すと別の本を見、それを横へ積んでいきました。そうして彼女が何気なく別の本に手を伸ばすと、それはまさしくあの夢に見た本ではありませんか。彼女は震える指で本をつかみ、しっかりと握りしめました。喜びの感動が胸に広がりました。彼女は後でそのときのことをこう言っています。「フワフワと有頂天になって、天井に頭がつくかと思ったわ。本を開いて読み始めると、確かに全部読んだ覚えがあるの。しまいまで読んだけれど、2度目に読んだ感じだった。」それがモルモン経だ

ったのです。

1838年にミシガン州リボニアに宣教師が来て、リディアと夫のサミュエル・ゲイツはバプテスマを受けました。そして聖徒たちと一緒に西部に向かい、ユタ州のリン(現在のオグデン市)に入植しました。リディアは生涯熱心な聖徒として、大勢の子供を育て、84歳で世を去りました。

(リディア・ゲイツの3番目の曾孫にあたるカレン・バブコックによる寄稿)



聖書を教えてくれた モルモン経

ジョン・F・ハイデンライヒ

神学校を出、何年も別の教会の牧師をしていて改宗した私にとって、初めて読んだモルモン経は大きな衝撃でした。生まれて初めて、轟々というナイアガラを見たようなショックでした。とてもくつろいで読めるような本ではありません。モルモン経の主張はおおごとで、無視などできません。

改宗する前の私は、現代の思潮と聖句の大方は時代に合わないとする聖書の進歩派解釈を教えられていました。大勢の神学者が別々の角度から「これこそが真理だ」と主張す

るのを聞いても、明瞭な思考ができていません。

心から望んでいるひとつの真理を持っていないことを私は、その真理を捜し求めていてモルモン経に巡りあったのです。私はモルモン経に非常に啓蒙されました。真理をむさぼるようにして、聖書と照らしあわせながら、7ヵ月ちょっとの間に5回読み上げました。それまで似たようなことに時間は使いましたが、それは一生で最もやりがいのある仕事でした。

モルモン経について一番びっくりしたのは、聖書がそれではっきりしたことでした。初めはどうしてそうなのかわかりませんでした。聖書とモルモン経は対となり、エゼキエル37：16、17にある次の聖句を成就する必要があったのです。「人の子よ、あなたは一本の木を取り、その上に『ユダおよびその友であるイスラエルの子孫のために』と書き、また一本の木を取って、その上に『ヨセフおよびその友であるイスラエルの全家のために』と書け。これはエフライムの木である。あなたはこれらを合わせて、一つの木となせ。これらはあなたの手で一つになる。」

私は、エゼキエルの言う木が、木に巻かれた巻物か本であることを知っていました。それは一部の学者が言うように旧約聖書と新約聖書を指すはずはありません。なぜならエフライムを通じたヨセフの支族は、旧約も新約も聖書とはほとんど無関係だったからです。ところがユダ族は聖書全体と密接な関係があります。聖書の偉大な王や予言者やダビデの王家は、ナザレのイエスも含めてユダから出ています。一方、モルモン経はすぐれたニーファイ人の予言者、王、判事たちによって記述、編纂されましたが、その人たちは皆、エジプトに売られたヨセフの子孫です。答えは明瞭です。エゼキエルの予言は聖書とモルモン経を指しているのです。

それまで慣れ親しんできた聖書の基本的な教えが、ほかにたくさん生氣を与えてくれました。

私は人類の永遠の救いにとって、アダムの墮落が必要だったという本当の意義を以前は理解できていませんでした。しかしモルモン経を読んで、アダムは従来のキリスト教で言うような人間の墮落を引き起こした悪者ではないということを知りました。私たち人間の代表であるアダムとイブは、無知の状態をなげうって、善悪の選択という重大な責任を負ったのです。

無邪気で清らかな幼な子は、なんと愛らしいことでしょうか。しかし同時に、もしその幼な子が無知と清さをそのままに、成長することなく、行動に責任を持つことができないとしたなら、なんとという悲劇でしょうか。モルモン経の次の聖句は、貴重な意味を持ってきます。「また、アダムとイブは子供をもうけることもなかったであろうし、それから不幸を知らないから喜びもなく、罪を知らないから善もなさず、そのまま罪が無い状態に留ったであろう。

アダムが墮落したのは人類を生ずるためであり、人類が

現世に在るのは幸福を得んためである。」(Ⅱニーファイ2：23、25)

疑いもなくアダムとイブは、私たちと同じように良くない選択の結果を被りました。また、正しい選択をしたときには、私たちが感じるような同じ喜びを感じました。

イザヤ書と旧約のこのすぐれた予言者の霊的な偉大さを理解する上で、モルモン経が特に役に立つこともわかりました。イザヤの素晴らしい予言の数々は、モルモン経と合わせて読むと誤解の余地なく明確に理解することができます。

またモルモン経から知ったことは、旧約聖書の中で神から受けた大きな約束をイスラエルが主張する上で、異邦人がそれを助けて重要な役割を果たすということ、つまり彼らがみ手の器となって全人類に救いをもたらすということです。(Ⅰニーファイ22：3-12)

モルモン経には聖書の教えを裏書きする同じ教えがあります。また、アルマ書32章で信仰を知識と比べて良い種にたとえているなど、聖書にはないモルモン経独自の教えもあります。モルモン経の中の信仰に関するこのすぐれた章は、信仰について、聖書の教えに対する理解を大いに増してくれました。

モルモン経の核心は、イエスがキリストであり、神の御子、私たちの救い主であるというその証です。それはまた、聖書を通じて流れるひとつの大きな主題でもあります。救い主としてのキリストの神性に対するモルモン経の概念は、新約聖書に生きている、かのイエスを浮彫りにしてくれます。

聖書があるからキリストにはもう証人などいらないと言うモルモン経に反対する人の意見は、マタイ伝があるから同じようなことを言うあとの3つの福音書はいらないというのと同じです。四福音書が互いに支持し、証し合っているように、モルモン経は聖書を証しています。

イエスはパレスチナで3年間み業を行ない、ニーファイ人の間には数日おられただけでしたが、ニーファイ第三書の記録でニーファイ人に対する主の愛情とニーファイ人の主に対する強い思いを知ると、地上での主の生涯が新たな展望を持ってきます。私たちは、イエスが地球の片側の人だけでなく、もう片側の人のためにも来られたことを知っています。「わたしにはまた、この囲いにいない他の羊がある。」(ヨハネ10：16)という新約聖書のイエスのみ言葉が、大きな意味を持ってくるのです。

モルモン経は主のみたまに満ちています。同じみたまを持ってそれを読む人は、必ずそれが真実だとわかります。イエス・キリストを愛しているならば、モルモン経を愛するでしょう。モルモン経はイエス・キリストを証しているからです。



リーハイから出た 7つの民

ロス・T・クリステンセン

リーハイ

ニーファイ人

レーマン人

レーマン人

レミュエル人

イシメル人

リーハイの後裔は、ニーファイ人とレーマン人のただふたつのグループであるというのをよく耳にする。しかし、実のところリーハイの子孫はそれよりもはるかに複雑である。キリスト降臨前の数世紀間に、ニーファイは4つのグループに分かれた。レーマン人も順に3つの部族に分かれた。こうして、リーハイから次の7つの民が出たのである。

ニーファイ人 レーマン人
ニーファイ人 レーマン人
ヤコブ人 レミュエル人
ヨセフ人 イシメル人
ゾーラム人

ヤコブ人とヨセフ人は、8年間の荒野の生活の中で生まれたニーファイの弟たちの名前にちなんで名づけられ

たものである。(I ニーファイ17:4 参照) ゾーラム人は、レーバンの召使いで、後にリーハイの家族の一員となった者の名前を取っている。(I ニーファイ4:33-35を参照)

レーマン人とレミュエル人はニーファイの兄たちの名前から来ており、イシメル人は、リーハイの息子たちの妻の父親の後裔である。

キリストが地上におられた間、人々はひとつの民であった。しかし背教によって、紀元200年代のニーファイ人の黄金時代は滅び、再び7つの部族の分離が目立つようになった。

これらの部族については、ニーファイの記録の中に3カ所出てくる。しかもいつも同じ順に述べられているのである。4番目は教義と聖約の中に示されている。

(1)ヤコブ1:13、紀元前約543年。

ニーファイが世を去った頃 (2)IV ニーファイ36-38、紀元231年頃 (3)モルモン1:8、9、紀元323年頃 (4)教義と聖約3:16-18、紀元1828年。以上4カ所である。

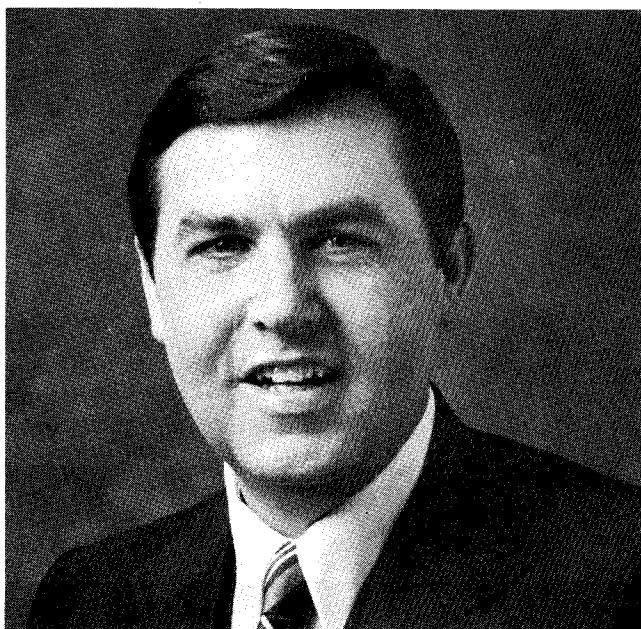
このように、千年に及ぶニーファイ人の歴史のほとんど初めから終りまでこの7つの民の記述があるということ、は、この7つの民が、リーハイの子孫として確固としたものであったことを示している。また、モルモン経の時代から1400年後のこの神権時代にあって、主がこの7つの民の存在を認めておられたことに注目していただきたい。

7つの民は今日どこにいるのだろうか
アメリカ大陸におけるリーハイの7つの民の散乱は、イスラエルの大散乱のほんの一部にすぎない。今日7つの民がどこにいるのかは、イスラエルの

失われた支族と同様、全く知られていない。しかしながら、この7つの民はどこかに存在しているはずである。なぜなら主は、彼らも救い主について知る機会にあずかることを、1828年に約束しておられるからである(教義と聖約3:16-18参照)。

「それにもかかわらずわが業は進み行かん。そは、ユダヤ人の証によりて一人の救い主のこと世に知られたれば、正にその如くわが民にも一人の救い主のことを知らなければなり。

すなわちまたニーファイ人、ヤコブ人、ヨセフ人、ゾーラム人にも、その先祖たちの証によりて知らるべきなり。すなわち、この証はまだレーマン人、レミュエル人およびイシメル人の間にも知らるべきなり。……」(教義と聖約3:16-18)



教会教育委員長
ジェフリー・R・ホランド

ニーファイがレーバンを殺したことを、教会員でない友だちにどう説明したらよいでしょうか。聖典らしくないと拒否する人もいます。

レーバンの命を取ったことについて話すとき、忘れてならないことが幾つあります。

1. ニーファイの小版は大きさも内容も限られているのに、ニーファイはその出来事をわざわざ詳細にわたって念入りに記録していること。自分でも実行がむずかしく、また大勢の人に誤解されている行動を、そんなにしてまで将来の読者に残したわけは何なのでしょう。簡単に省かなかったのはどうしてでしょうか。小版には「神と俗世間の仲間でない者を喜ばせること」だけを書いて、「人間にとってねうちのことでこの版をふさいではならぬ」と言っているのですが。(I ニーファイ 6 : 5、6)。それがひとつの糸口だと思います。

2. ニーファイが何としてもレーバンを殺そうとしたと考えるのは間違いです。彼は青年ですし、かたき討ちが普通に行なわれている不穏な紀元前 600 年とはいえ、ニーファイは「どんな時にも人の血を流したことはなかった」のです (I ニーファイ 4 : 10) レーバンを殺さなければならぬ理由はひとつも見当たりません。子供の頃から「殺してはならない」という戒めを教えられていますし、彼は初め、みたまの勧めをも拒んでいました。

3. 聖書を読む人は、シナイ山で人の命を取ってはならないという戒めを受けたモーセ自身が、主は殺し、また生かし、傷つけ、またいやすとも歌っていることを思い出すでしょう (申命 32 : 39)。現実にはそのモーセが、シナイ山から下りて十戒もまだ胸に新しいうちに、イスラエルの偶像崇拜者を 3 千人も殺しています。全く偏見を持たずに見れば、ニーファイがレーバンの剣を奪い、一国を守るためにレーバンを殺したと聞いて顔をしかめながら、グビデが一国を救うためにゴリアテの剣を「さやから抜きはなし、それをもって彼を殺し、その首をはねた」(サムエル上 17 : 51) ことを、手のひらをかえすようにあっぱれとほめることはできないはずです。このことについては聖書もモルモン経も類似しています。

4. ニーファイの前に泥酔して倒れていたレーバンは、リーハイの家族に対して悪事を働いていました。あまり詳しくは記録されていませんが、レーバンは少なくとも次にあげるようなことをしていました。(1) 神の戒めを守らなかった、(2) 潔白なレーマンに盗みの嫌疑をかけた、(3) 欲をむきだしにリーハイの持ち物をねらった、(4) リーハイの持ち物をすっかり奪った、(5) ニーファイとその兄たちを 2 度まで殺そうとした。聖きみたまの言うところによれば、レーバンは主の手からニーファイに渡された「悪人」(I ニーファイ 4 : 13) なのです。

5. 「悪人」に対する旧約聖書の厳しい裁きを別にするとしても、私たちの神権時代を治める律法の中に、ニーファイに下された厳しい命令の根拠が見つかります。主は予言者ジョセフ・スミスにこう言われました。

「また己が罪を悔い改めずしてこれを告白せざる者は、汝らこれを教会の前に引き出して、神の誠命または啓示何れか聖典に示されたるが如くに処置すべし。汝らこれを神の御栄の顕れんためになすべし。もとより汝らが彼を赦さざるためにあらず、また彼を憐れまざるためにもあらず、汝らが律法の前に義しとせられ、汝らの立法者をして怒らせぬためなり」(教義と聖約 64 : 12、13)

レーバンに対する処置は「啓示」によるもので、ニーファイは初めはしりごみしましたが、「立法者」である神の怒りにふれないように、結局はレーバンを殺さなければならなかったのです。

6. ですから、律法の適用は立法者の命によって変わることがわかります。私たちにとってもまたニーファイにとっても大切なことは、真理をささやく聖霊の声を知ってそれに従うことです。予言者ジョセフ・スミスはこう教えました。「神は『あなたは殺してはならない』と言われ、また別のときには『すべて滅ぼせ』と言われた。これが天の王国を司る原則である。すなわち啓示により、王国の子らが置かれた環境に応じて適用するのである。たとえ私たち

がその出来事の後久しくその理由がわからないとしても、神が求めたもうものは何であれ義しい。……神が私たちに与えたもうすべてのことは、律法にかなって義しいのである。』(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.256)

7. 結局、人を殺したことよりも、神の啓示に対する従順がこの話の言わんとするところではないかと思えます。神は今も永世にも人の命をよみがえらせることができますが、故意に逆らう人に対してはほとんど何もなさいません。神の戒めに対して私たちがどれだけ従順であるかが、その人の信仰を最もよく表わすのです。

最後に申し上げたいことがあります。これまで述べてきて(理由はもっとあがるかもしれませんが)わかったことは、初めの、この話をとうして詳しく記録したかという疑問について、今まであげてきたことがほんの部分的な答えでしかないということです。ここにあげたもっともな考えや納得のいく理由に加えて、この話は少なくとももうひとつ、とても大切なことを教えています。それは人類不朽の解答、すなわち生と死、聖典の大切さ、「聖い予言者たち…によって語られた言葉」(I ニーファイ 3 : 20)を載せた記録の大切さをあらためて強調しているということです。

命をかけて記録を取りにエルサレムへ戻ったニーファイの決意を理解しない人は、モルモン経をこの神権時代に世に出すことが是非とも必要なわけや、地獄の力が少年予言者から真鍮版を奪い取ろうとしたわけや、私たちが聖典を調べて神のすべての言葉に従わなければならないわけが決してわからないでしょう。ニーファイの民が荒野を行くときにこの真鍮版を持って行くことが「主のみこころにかなうこと」であったように(I ニーファイ 5 : 22参照)、私たちも約束の地へ向かう自らの旅に神聖な記録を携えて行かなければなりません。そうでなければ、「信仰がなくなって亡びてしまう」だけだからです。(I ニーファイ 4 : 13)

命をかけて記録を取りにエルサレムへ戻ったニーファイの決意を理解しない人は、モルモン経をこの神権時代に世に出すことが是非とも必要なわけや、地獄の力が少年予言者から真鍮版を奪い取ろうとしたわけや、私たちが聖典を調べて神のすべての言葉に従わなければならないわけが決してわからないでしょう。ニーファイの民が荒野を行くときにこの真鍮版を持って行くことが「主のみこころにかなうこと」であったように(I ニーファイ 5 : 22参照)、私たちも約束の地へ向かう自らの旅に神聖な記録を携えて行かなければなりません。そうでなければ、「信仰がなくなって亡びてしまう」だけだからです。(I ニーファイ 4 : 13)

監督と長老定員会会長との関係

この度、大管長会ならびに十二使徒評議員会は、監督と長老定員会会長の関係を明確にするため、次のような声明を発表した。

ワード部の監督と長老定員会会長との関係で生じている幾つかの疑問点を明確にし、両神権指導者が管轄する人々に対して最大限の助けを与えることができるように、以下の点に留意していただきたい。

監督

1. 監督はアロン神権の会長として管理する。
2. 監督はワード部の管理大祭司であり、ワード部の全会員、すなわち(メルケゼデク神権者を含む)全男女と子供たちを管理する。
3. 監督はワード部福祉活動委員会の委員長であり、ワード部の福祉活動その他物質的な事柄に対して全般的な責任を負う。
4. 監督はイスラエルの判士である。神殿推薦状発行のための面接を行ない、またワード部のすべての会員がふさわしい状態にあるかどうか判断する責任がある。監督は背罪者を監督法廷に召喚し、ワード部に記録がある会員に対しては正会員資格を剥奪することができる。またメルケゼデク神権者以外の教会員を破門処分に付することもできる。しかしメルケゼデク神権者

であって、会員資格剥奪を越える懲戒処分を必要とする場合、監督はステーク部長会に委託する。

5. 監督は、ワード部神権役員会の会長としてその集会を管理し、司会し、管理大祭司として指示を与える。またワード部コーリレーション評議会の管理と指導を行ないワード部会員のためにすべてのプログラムの相互調整を図る。
6. ワード部神権役員会の会長である監督は、管理大祭司として、ワード部のホームティーチング・プログラムを管理する。そして、すべての家族がホームティーチングの対象として、メルケゼデク神権定員会またはグループに割り当てられるようにする。監督はまた、メルケゼデク神権定員会またはグループ、ユニットの指導者から、月例神権個人面接でホームティーチングの結果の報告を受ける。
7. 監督はワード部の諸活動についてステーク部長に報告する責任がある。

長老定員会会長

1. 長老定員会会長は、定員会活動に関して直接的な責任を負う。長老定員会会長の召しと解任はステーク部長が行なう。
2. 長老定員会会長は、その定員会会員の管理だけでなく、アロン神権を持つ多数の長老見込み会員に

対しても責任を負う。

3. 長老定員会会長は、定員会の各会員を訓練し、長老と長老見込み会員が活発になり、責任を果たすようになるのを援助する義務がある。また定員会会員や長老見込み会員の一人一人について進歩と活動の状況を監督に報告する。
4. 長老定員会会長は、長老と長老見込み会員に対する責任を果たすにあたって、大祭司をホームティーチャーに割り当てるよう監督やほかのメルケゼデク神権指導者に要請し、長老および長老見込み会員とその家族を活発にする援助を得る。その際、割当てを受けた大祭司はそのホームティーチングの結果を長老定員会会長に報告する。
5. 長老定員会会長は、父親が家庭と教会の務めをよく果たすよう直接に、またホームティーチャーを通して間接的に見守る責任がある。しかしながら、長老定員会会長はその会員の家族を管理はしない。例えば、長老定員会会長は夫と妻を呼んで、夫婦の問題について助言する権能もなければ、定員会会員の子供たちに助言を与える権能もない。そのような事柄はすべて監督に任せなければならない。
6. 長老定員会会長は、定員会の諸活動についてステーク部長に報告する責任がある。

四福音書の対観表 (「聖徒の道」 4月号より続く)

第4の時期：ガリラヤにおける伝道

A. ガリラヤに帰ってから、十二使徒を選ぶまで
(「四福音書」第16-17課)

出 来 事	場 所	マタイ	マルコ	ル カ	ヨハネ
ガリラヤで福音を教える	ガリラヤ	4 : 17	1 : 14-15	4 : 14-15	4 : 45
役人の息子をいやす	カナ				4 : 46-54
ナザレで拒まれる	ナザレ			4 : 16-30	
カペナウムで教える	カペナウム	4 : 13-16		4 : 31-32	
ペテロ、ヤコブ、アンデレ、ヨハネを召す	ガリラヤ	4 : 18-22	1 : 16-20	5 : 1-11	
汚れた霊を追い出す	カペナウム		1 : 21-28	4 : 31-37	
ペテロのしゅうとめをいやす。数多くの奇跡を現わす	カペナウム	8 : 14-17	1 : 29-34	4 : 38-41	
旅をしながら福音を宣べ伝える	ガリラヤ	4 : 23-25	1 : 35-39	4 : 42-44	
らい病人をいやす	ガリラヤ	8 : 1-4	1 : 40-45	5 : 12-16	
中風の者をいやす	カペナウム	9 : 2-8	2 : 1-12	5 : 17-26	
マタイを召す	ガリラヤ	9 : 9-13	2 : 13-17	5 : 27-32	
断食について語る(ガリラヤの海の付近)		9 : 14-17	2 : 18-22	5 : 33-39	
第2回目の過越の祭	エルサレム				5 : 1-47
弟子たち、安息日に穂をつむ	ガリラヤ	12 : 1-8	2 : 23-28	6 : 1-5	
片手のなえた人をいやす	ガリラヤ	12 : 9-14	3 : 1-6	6 : 6-11	
ガリラヤの海辺へ退く		12 : 15-21	3 : 7-12		
十二使徒の聖任	ガリラヤ	10 : 1-4	3 : 13-21	6 : 12-16	

注：ここで言う「ガリラヤ」は、サマリア北方のパレスチナを指し、東はヨルダン川とガリラヤの海の西岸で区切られる。



カナ

第4の時期：ガリラヤにおける伝道（続き）

B. 山上の垂訓を教えてから北部ガリラヤへ旅立つまで
(「四福音書」第18-23課)

出 来 事	場 所	マタイ	マルコ	ル カ	ヨハネ
山上の垂訓 ¹		5-7章		6 : 17-49	
百辛長の僕をいやす	カペナウム	8 : 5-13		7 : 1-10	
ナインでやもめの息子をよみがえらせる	ナイン			7 : 11-17	
ヨハネ、使いの者をイエスのもとへ遣わして問う	ガリラヤ	11 : 2-19		7 : 18-35	
罪の女、イエスに香油を塗る	ガリラヤ			7 : 36-50	
ガリラヤの町々村々を巡る	ガリラヤ			8 : 1-3	
盲人のおしをいやす	カペナウム	12 : 22-23			
ベルゼブルであると責められる	カペナウム	12 : 24-37	3 : 22-30		
しるしについて説教する	カペナウム	12 : 38-45			
母と弟たち、イエスに会いにくる	カペナウム	12 : 46-50	3 : 31-35	8 : 19-21	
群衆に譬で教える(ガリラヤの海辺)	ガリラヤ	13 : 1-3	4 : 1-2	8 : 4	
種まきの譬	ガリラヤ	13 : 3-23	4 : 3-25	8 : 5-18	
秘かに育つ種の譬	ガリラヤ		4 : 26-29		
毒麦の譬	ガリラヤ	13 : 24-30			
からし種の譬	ガリラヤ	13 : 31-32	4 : 30-32		
パン種の譬	ガリラヤ	13 : 33			
毒麦の譬の解説	ガリラヤ	13 : 36-43			

1. タルメージ長老は、山上の垂訓を十二使徒の召し以後のこととしている。(「基督イエス」p. 268参照)



ガリラヤの海

出 来 事	場 所	マタイ	マルコ	ル カ	ヨハネ
その他の譬	ガリラヤ	13 : 44-53			
嵐を静める (ガリラヤの海)	ガリラヤ	8 : 23-27	4 : 35-41	8 : 22-25	
悪霊を追い出す	ゲラサ(ガダラ)	8 : 28-34	5 : 1-20	8 : 26-39	
カペナウムへ帰る	カペナウム	9 : 1	5 : 21	8 : 40	
ヤイロの娘をよみがえらせる	カペナウム	9 : 18-19	5 : 22-24	8 : 41-42	
		23-26	35-43	49-56	
長血をわずらっている女をいやす	カペナウム	9 : 20-22	5 : 25-34	8 : 43-48	
ふたりの盲人をいやす	カペナウム	9 : 27-31			
悪霊につかれたおしをいやす	カペナウム	9 : 32-34			
ナザレで再び拒まれる	ナザレ	13 : 54-58	6 : 1-6		
ガリラヤの町々村々を巡る	ガリラヤ	9 : 35-38	6 : 6		
十二使徒を伝道に遣わす	ガリラヤ	10 : 1,5-42	6 : 7-13	9 : 1-6	
さらに町々村々を巡る	ガリラヤ	11 : 1			
ヘロデ、ヨハネの首をはねる ²	マケルス	14 : 6-12	6 : 21-29		
ヘロデ、イエスはヨハネであると思う	ガリラヤ	14 : 1-2	6 : 14-16	9 : 7-9	
十二使徒、伝道の報告をする	カペナウム		6 : 30	9 : 10	
ベツサイダへ退く	ベツサイダ	14 : 13	6 : 31-32	9 : 10-11	
5千人に食を与える (ベツサイダ付近)	ガリラヤ	14 : 14-21	6 : 33-44	9 : 12-17	6 : 1-14
王にしようとする人々を避ける	ガリラヤ	14 : 22-23	6 : 45-46		6 : 15
ガリラヤの海上を歩く	ガリラヤ	14 : 24-23	6 : 47-52		6 : 16-21
命のパンの説教をする	カペナウム				6 : 22-71
ゲネサレで人々をいやす	ゲネサレ	14 : 34-36	6 : 53-56		
人を汚すものについて説教する	カペナウム	15 : 1-20	7 : 1-23		

2. タルメージ著「基督イエス」では、バプテスマのヨハネの投獄から死に至るまでが、一連の記事にまとめられている。(「基督イエス」 pp. 294-302参照)

第4の時期：ガリラヤにおける伝道（続き）

C. 北部ガリラヤに上ってからガリラヤでの伝道を終るまで
 (「四福音書」第24-25課)

出 来 事	場 所	マタイ	マルコ	ル カ	ヨハネ
北方の地へ旅する		15 : 21	7 : 24		7 : 1
ギリシャ人の女の娘が癒される	ツロとシドンの地方	15 : 22-28	7 : 25-30		
ガリラヤの海辺へ帰る	ガリラヤの海	15 : 29	7 : 31		
耳の聞こえない男が癒される	デカポリス		7 : 32-37		
四千人の群衆に食物を与える	デカポリス	15 : 29-38	8 : 1-9		
マグダラへ行く (ガリラヤの海)	マグダラ	15 : 39	8 : 10		
しるしについて話す	カペナウム	16 : 1-4	8 : 11-12		
盲人が癒される	ベツサイダ		8 : 22-26		
キリストについてのイエスの証	ビリボ・カイザリヤの地方	16 : 13-20	8 : 27-30	9 : 18-21	
死と復活について弟子たちに教える	ビリボ・カイザリヤの地方	16 : 21-28	8 : 31-38 9 : 1	9 : 22-27	
山上の変貌—神権の鍵の授与	変貌の山 ¹	17 : 1-13	9 : 2-13	9 : 28-36	
悪霊を追い出す		17 : 14-21	9 : 14-29	9 : 37-43	
再びガリラヤへ向かう	ガリラヤ	17 : 22-23	9 : 30-32	9 : 43-45	
宮の納入金について問われる	カペナウム	17 : 24-27			
謙遜について教える	カペナウム	18 : 1-14			
赦しと結び固めの力について説く	カペナウム	18 : 15-35			
キリストに代わって働く者の責任	カペナウム		9 : 38-42	9 : 49-50	
犠牲について説く ²	カペナウム			9 : 57-62	
七十人の伝道	カペナウム			10 : 1-16	
ユダヤへ行くように勧められるがそれを拒む	ガリラヤ				7 : 2-9
エルサレムへ向かう				9 : 51-56	7 : 10

- ヘルモン山またはタボル山
- 「基督イエス」 p. 356 脚注 4



タボル山



「バプテスマを受けて」

日本福岡伝道部

那覇支部 板倉徳雄

私は1976年5月15日にバプテスマを受けました。バプテスマの日、それは36年の私のこれまでの人生でかつてなかったほどの緊張と喜びを味わった日でした。そして私をこの教会に導いてくれた多くの宣教師、兄弟姉妹、そして私の妻である姉妹に感謝の気持で一杯でした。振り返って、教会へ導かれる前のかつての自分を思い起こすとき、全く高慢で墮落した状態にあったことを恥じ入り、そのような私をも赦してくださった神様の大きな愛に、心からの感謝の気持で今も一杯です。

水に沈められるバプテスマを受け、按手札によって聖霊の賜を授けられたときに、本当に心が熱くなり安らぎを感じることができました。たくさんの兄弟姉妹から祝福をいただきましたが、とりわけ私の家族が一番喜んでくれたことと思います。私の家族は5人家族ですが、父親である私だけがこれまで教会へ行かず、信仰がなかったからです。これまでの私は、男性にとっては仕事が生きがいであり、そのために家族の犠牲はある程度、やむを得ないと思っていましたので、家族のことを本当に思いやる心がなかったのだと思います。それに信仰心が全くなく自分では合理的な精神の持ち主だと自負していましたので、世の常識からはずれた信仰生活をする人はよほどの変り物か、現実の競争社会から逃避した人か、あるいは一種の集団催眠にかかった人たちである位に考えており、私とは無縁のことと思っていました。ですからすでに3年前に教会員になった妻の言葉にも耳をかさず、ホームティーチャーにも会わずに、相変わらずきわめてこの世的な生活を続けていました。

でもこのような私の所にも、神様は、素晴らしい宣教師を遣わして下さいました。初めはかたくなに、心からその話を聞こうとしなかった私ですが、宣教師の不思議な魅

力に引かれて、レッスンが始まりました。そして多くの日時を費やしてレッスンは進みましたがなかなか証が得られませんでした。まだ完全に戒めを守った生活をしていなかったからです。

私はとてもお酒が好きでしたし、仕事の付き合いの上でも完全にお酒をやめることなどとてもできないと思っていました。でも宣教師から説かれ、神様を試みる気持でしばらくの間、戒めを守った生活をしようと決意してこのチャレンジを受けました。そして再びモルモン経を読み返したときに、今まで飛ばし読みし、心をこめて読んでいなかった一節一節の聖句に深い意味があることがわかりました。そのとき眼が改めて開かれる思いがし、自分の罪の深さを思い知らされ、バプテスマを受けて赦しを受けたいと心から願う気持ちになりました。

「真理は自由を得させるであろう。」私は今までの自分とすっかり変わった自分を感じることができるようになりました。こうして今は私も、私の家族も豊かな祝福を受けて、導かれて神の教会の会員として召されたことを心から感謝しております。

モルモンの家族として新しい人生を歩み始めた私たちは、まだ信仰が浅く、聖典の知識も十分ではありませんが、家庭に平安と多くの祝福を与えて下さる神様に感謝し、この教会が真の神の教会であることを固く信じて、気長に信仰を育ててゆきたいと思っています。「しかし神の御言葉である木が生え始める時からその実の生る時を待ち設けながら勉めはげんで、気長によく信仰をもってこれを養うならば、その木は根を下ろして永遠の生命を生ずる木になるであろう」(アルマ32:41)この聖句のように。

先月号に下記の誤りがありましたのでお詫びして訂正させていただきます。

p.328 伝道部数……1761→134、伝道部内支部数……134→1761

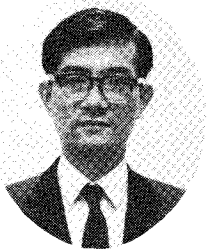
p.384の写真のキャプション 日本西部伝道部長→日本福岡伝道部長

p.442 1段目上から12行目 私の父の母→私の父と母

同じく下から11行目 ジョセフ・スミス→ジョセフ・F・スミス

同じく上から21行目 この福音の→「この福音の

p.443 3段目上から22行目 ジョン、テイラー→ジョン・テイラー



「学ぶために入学し、奉仕するために 世に出て行こう」

——ブリガム・ヤング大学の標語——

日本大阪ステークス部

西宮ワード部 沼野 治郎

この2年弱の年月は非常に短いものに感じられた。以前横浜に住んだ1年間の方がよほど長く思われる。それはブリガム・ヤング大学における学業生活が厳しく、夢中に取り組んでいる内に時間がたってしまったためであろう。

10年ぶりの大学生活であったが、日米の大学生活には大きな違いがあることを知った。日本の大学では1年間でひとつの時間的な単位が終わり、履習科目の成績が出るのに対し、向こうではひとつの科目は4ヵ月の1学期で終了し、成績が出る仕組みになっており、その間教室内の1時間に対し、3時間勉強することが要求されている。毎回教科書や指定された論文を相当なページ数読んでくるように求められ、しばしばレポートやノートの提出あるいは発表も要求される。そのため学生は絶えずかなりの緊張状態におかれ、特に期末の試験期が近づくとその度合は大きくなる。私が経験し記憶している日本の大学生活とは大違いである。

従ってその4ヵ月で得る理解、進歩もそれだけ著しい。例えばギリシャ語を1学期学んだが、その成果は、私が日本の大学で1年間学び、それ以後細々ながら10年間独習してきたヘブル語の知識を遙かに上回るものであった。また苦手だった言語学も専攻科目として、学期を追う毎に理解が深まっていった。

1974年9月から1976年4月までブリガム・ヤング大学言語学部に籍を置き、無事修士課程を終了して帰ったが、この2年弱の留学は私にとってそれ以上のものであった。末日聖徒イエス・キリスト教会が経営する大学にあって、宗教の、あるいはギリシャ、ヘブル語等古典語の教授が説く回復された福音の教義の解説を、貪欲に吸収して帰ることが大きな目的であった。そこで時間の許す限りそのような授業に出よう心掛けた。あるとき、カリフォルニア出身の改宗者が同様の考え方を持って、熱心に宗教の授業に参加しているのに出会って、その人と意気投合したことがあった。この点では2年間という歳月は必ずしも十分ではなく、しかも専攻科目がだんだんむずかしくなり、終りに近づいて論文にかかり

始めるにつれ、あまり時間をさけなくなった。しかし、私としては悔いのない留学であったと思っている。

幾人ものすぐれた学者に出会い数多くの収穫を得たが、中でも私にとって最も大きなものは、かねて尊敬していたヒュー・ニブレー教授に接し、彼の授業によってエンダウメントに対する積年の疑問が氷解したことであった。以前からニブレー教授の「エラ」誌の記事などにエンダウメントに係りのある内容が散見することは気づいていたが、直接授業に出て、あまりにもエンダウメントの講話に近い内容が頻出するのを見た私は、ある日急に心が柔らいで、真実の儀式が啓示によって回復されたものに違いない、と悟り始めるに至った。それから何日か後、神殿でエンダウメントの儀式を受けながら、改めてバプテスマを受けたかのように、疑問という重苦しいかせから解き放たれた自分に気づいたのであった。その時の喜びは大きく、胸の中からこみあげてくるような感激を覚え、目に浮かんできた涙をそっとぬぐったものである。心の頑な私は、教会内はもちろん教会外でも並ぶものの少ない、碩学ヒュー・ニブレー教授に接して初めて心を柔らげ、納得するに至った。これは何にもかえがたい大きな収穫であった。

他にも修士論文を作成するに当たって、モルモン経（英文）にヘブル語の特徴がほとんど各頁に内在しているという記事を読んで、モルモン経に対する証も深めることができた。また言語学では、言語が人に固有のものであって、それと同様のものは動物には見受けられないという事実に接したことも、私の信仰を強める材料であった。

BYUは「学ぶために入学し、奉仕するために世に出て行こう」という標語を掲げている。この標語のとおり、私は今人々と神に仕えたい希望で一杯である。ささやかであっても残された人生を活用し、タラントをふやして主にまみえるようにしたい。中でも特に教義の面で会員の皆様に貴重な解説となる著書や雑誌の記事を翻訳、紹介していくことができればというのが私の心からの願いである。

「人の子よ、あなたは一本の木を取り、
その上に『ユダおよびその友であるイス
ラエルの子孫のために』と書き、また一
本の木を取って、その上に『ヨセフおよ
びその友であるイスラエルの全家のため
に』と書け。これはエフライムの木であ
る。

あなたはこれらを合わせて、一つの木
となせ。これらはあなたの手で一つにな
る。」（エゼキエル 37：16, 17）